

アイヌ語ブロックのその後

—普及行事での活用—

田村雅史

Key Words

アイヌ語ブロック (Ainu language block)、利用者ニーズ (Needs for museum visitors)、博物館教育 (Museum education)、言語教育 (Linguistic education)、言語問題 (Linguistic issues)

1 はじめに

本報告は出利葉との共著である「北海道博物館における言語展示への試み—総合展示第2テーマに設置した「アイヌ語ブロック」を中心に—」(『北海道博物館研究紀要1』2016年、127～148頁)の続報である。本報告では、最初に総合展示に展示されているアイヌ語ブロック(写真1)を概観した後に、次の3つの内容から報告を行う。

まず1つめは、田村・出利葉(2016)で課題とした点に関する報告である。田村・出利葉(2016)では、「この「アイヌ語ブロック」に興味をもった子どもたちに、つぎにどのようなプログラム、とくに博物館としてどのような展示や講座などの企画を用意すればよいのかという課題もある」とし、筆者は当館職員の大谷洋一と共に、北海道博物館開設後から4年間、このアイヌ語ブロックを活用した普及行事「アイヌ語であそぼう!」を実施した。報告では、その講座をどういった観点に立って、どのようにプログラムを組んだかについて報告する。

筆者らが担当した「アイヌ語であそぼう!」は、当館の教育普及行事の中でも、当館職員が子ども向けに実施している「ちゃれんが子どもクラブ」の1つである。この行事は、主に小学生とその保護者を対象として、親子でものづくりや体験ができるプログラムを中心に事前予約制で、年間で10講座程度実施している一連の講座である。例えば、「文字で遊ぼう♪ 消しゴムはんこづくり」や「アンモナイトを解剖しよう」など、他分野にわたる講座が用意されている。そうした「ちゃれんが子どもクラブ」という括りではあるが、各講座の参加者数や当館が実施した来館者調査(栗原・田村 2017; 栗原・池田・堀 2018)を参考にして、博物館の利用者の関心について推察し、自身の講座を自己評価しながら報告することは許されるだろう。報告内容の2つめは、筆者らが実施した「アイヌ語であそぼう!」および総合展示の

「アイヌ語ブロック」を含めた博物館利用者におけるアイヌ語ニーズに対する考察である。

そして、2つめの内容を受けて、視点を博物館からアイヌ語または言語に移して、この報告の総括をすることが3つめの内容である。

「アイヌ語であそぼう!」は、方針として「楽しさ」を重視し、講座プログラムやクイズシートをもう1人の講師である大谷に確認しながら、制作したものである。2人の関係性は、講座企画の検討、クイズシートの準備、進行スケジュールの作成といった一連の事前準備を田村が行い、当日は田村が進行や説明を担当し、クイズシートの答え合わせを2人が行うという関係である。また本報告も大谷に執筆の意は伝えているが、報告内容等は筆者の一存による。従って、本報告のすべての文責は筆者にあることをここで明記しておく。

なお北海道博物館が実施している教育普及行事の企画、実施報告、実績集計は学芸部道民サービスグループが担当している。本報告で示す実績数は、学芸部道民サービスグループの報告によっていること、本報告で取り上げる「アイヌ語であそぼう!」の館内的な報告の趣旨と本稿の分析や考察は関連しないことを断っておく。

2 総合展示の「アイヌ語ブロック」

本題に先立って、田村・出利葉(2016)の中から本稿に関係の深い部分を掻い摘んで説明しておきたい。

まず北海道博物館は「北海道博物館基本計画」(北海道、2010年9月)、「北海道博物館実施計画」(環境生活部、2013年3月)に基づき設置され、博物館の目玉である展示もそれらの考え方に沿って制作された。「実施計画」の中では展示の手法について、より具体的な内容が示されている(詳しくは田村・出利葉 2016参照)。田村・出利葉(2016: 129)では、「基本計画」と「実施設計」からアイヌ文化展示の使命とも言える点を以下の

ようにまとめ、「アイヌ語ブロック」についてⅠ～Ⅲの観点から自己評価を行った。なおⅠとⅡは「基本計画」による。

- Ⅰ. アイヌ文化を保存・伝承し未来に活かす
- Ⅱ. 最新の研究成果に基づいた展示
- Ⅲ. 「わかりやすく、おもしろく、ためになる」展示
 1. 「来るたびに違う」展示
 2. 「飽きない」展示（五感を刺激する展示）
 3. 「ユニバーサル」な展示

上の点を踏まえ、筆者はさまざまな展示品がある中の1つとしてアイヌ語の展示が存在するようにしたいと考え、「形を持たないもの」（音声）として「ことば」を展示するのではなく、「形を持つもの」として「アイヌ語ブロック」を制作した。その際のコンセプトは次のとおりである（田村・出利葉 2016：130）。

子どもたちが、楽しみながら感覚的にアイヌ語の語彙や文法に親しめる。

アイヌ語にもさまざまな方言がある。けれども、話者数や研究者数、さらには交通の便を含めた時代的背景もあり、各方言の資料状況や研究の進捗には差がある。そこで方言の選択に際しては、人称接辞の体系、確実な辞書や語彙表の有無、という基準のもと、胆振方言を選んだ。現在、市販された学習書や辞書がある沙流方言や千歳方言は、アイヌ語方言の中でも最も知られた方言ではある。しかし、これらの方言では、接頭する単語の語頭の音によって、1人称の形式が変化するため、アイヌ語ブロックという媒体には相応しくないと判断し、選択しなかった。

制作したアイヌ語ブロックは、プラスチック性の6面体で、文を構成する副詞句、名詞句、人称接辞、他動詞の4つのブロックから構成され、それぞれのブロックには色が付いている。ブロックの色は、アイヌ語の1つの特徴である動詞と人称接辞に注目して欲しいと考え、ある機関が行った小学生の調査に基づき（調査先は田村・出利葉2016を参照のこと）、男女ともに一番好まれる青を動詞の色にし、二番目に好まれる赤を人称接辞の色とした。

名詞句と人称接辞には単語と一緒にイラストが添えられている。イラストは五感を刺激する展示という使命Ⅲ-2とユニバーサルな展示という使命Ⅲ-3に沿うものとして考えた。ただし、多言語対応や障害のある人に対しては課題を残している。

単語が書いてあるブロック面は、再剥離シールで印刷して貼る仕様になっている。ブロック本体は4つがちょ

うど収まる台に置かれていて、その台にもブロックと同じ色のシールが貼ってある。アイヌ語ブロックの各面を再剥離シールにしたのは、「来るたびに違う」展示という使命のⅢ-1を意図して、単語を入れ替えることを考えたからである。ブロック台に同じ色のシールを貼ったのは、ブロックが散乱したり、紛失するのを予防する意図もあるが、色合わせによって文法的に正しい語順に誘導したいという意図からである（あえて言うならば使命Ⅱに相当）。

各ブロックの組み合わせについては、何パターンかは現実世界でもありえる自然な文になることを確認しながら選択しているが、すべての組み合わせが自然な文にするのは不可能に近い。そのため、使命Ⅲ-2に資するものとして、おかしな文章が出来ることも可とした。ただし、闇雲に動物の名称ばかり入れるのではなく、名詞句のブロックには動作主性が高い名詞（人間や動物）と動作主性の低い名詞（植物、道具など）をバランスよく入るように単語を選択している

最後に総合展示のアイヌ語ブロックの解説文について紹介しておこう。解説文は必要最小限という方針のもと、3つ掲示している。それらは、タイトル、作文の例、アイヌ語の発音と表記である。発音と表記のパネルでは、アイヌ語が現在ローマ字またはカタカナで表記されること、小文字の「プ、ク、ロ」などの発音や説明、さらにアクセントといった点は、来館者に必要最低限の情報を短時間で感覚的に理解してもらって、アイヌ語の特徴のポイントを捉えて帰って欲しいと考えたため（必要最低限の方針）、解説していない。

3 「アイヌ語であそぼう！」に関する報告

当館の教育普及行事の企画や広報は、学芸部道民サービスグループが担当している。教育普及行事の業務の流れを説明すると、まず実施年度の前年11月頃から道民サービスグループが行事の枠組みを立案する。その後、行事区分に沿ってエントリーを各研究グループから募って、実施日などを調整する形で年間行事が作成される。作成された年間行事は、当館では前期と後期にわけて「行事案内」として印刷し、前期ならば3月ぐらいに関係機関に配布される。各講座の広報は、おおむね1か月前からホームページや館内チラシなどで行う。具体的な講座内容の検討は担当者に任せられ、開催日が近くなると道民サービスグループの担当者と会場準備や進行に関する簡単な打合せを行う。そして各講座が終了すると、参加者数や行事運営上の問題点などを道民サービスグループの担当者が報告を行う。その報告をベースにして、年

度末には年間実績として報告書が作成され、その実績数値が要覧等に反映される。

以上が当館の教育普及行事の一連の流れである。ここでは道民サービスグループが担当している教育普及行事の企画や広報といった全体的な業務報告ではなく、各担当者に委ねられている企画趣旨とプログラム内容の検討、実績など、講座実施者の所見を交えながら報告を行う。

(1) 企画の趣旨と検討

西(1999)は、博物館の教育活動を企画する際に、(1) 活動の対象、(2) 目的、(3) テーマ、(4) 安全性、(5) 楽しさ、(6) 広報、(7) 活動の評価、以上の7点について検討すべきとしている。以下では、本報告で必要ないと思われる(4)(6)(7)を除いた項目について「アイヌ語であそぼう!」の場合、どうであったかを順に報告する。

(1-1) 活動の対象

西(1999:68)は普及行事等の博物館の教育活動を企画する際には、「参加者の年齢層だけではなく、その属性やテーマに対する関心の度合いなども検討して、それに相応しい内容を企画すべきである」と述べている。「テーマに対する関心の度合い」は、後ほど述べるとして、ここでは年齢層と属性について述べて行こう。

年齢層は、筆者らが実施した「アイヌ語であそぼう!」は、「ちゃんれが子どもクラブ」の枠であるため、活動対象は小学生とその保護者である。

次に属性であるが、田村・出利葉(2016)において、来館者の属性として比率が高い順に以下のような想定を示した。

- ①アイヌ語は、話す、聞くといった言語体験を有していない。
- ②言語体験もなく、アイヌ語の言語外的な情報(歴史や社会状況)も知らない。
- ③言語体験やアイヌ語を学習したことはないが、言語外的な情報は知っている。
- ④学習により、アイヌ語がどういう感じかある程度知っている。
- ⑤言語学一般の知識もあり、アイヌ語の構造をよく知って、教えることが出来る。

田村・出利葉(2016)において、総合展示にある「アイヌ語ブロック」は、①～④の属性を持つ来館者をターゲットとしていることを述べ、講座については「(総合展示にある)「アイヌ語ブロック」で興味をもった子どもたちに(以下略)」と述べていた。企画検討の際には、展示を見たかどうかは考えず、参加者の属性は①と②と

想定した。

この違いは、田村・出利葉(2016)は「モノ」と「博物館」という博物館教育論的な視点であり、講座企画の際には、言語、つまり言語教育論的な視点で講座を企画したということになる。そのように講座の参加者を想定したのは、例えば、テレビや新聞、さらには学校の授業でアイヌ語地名やアイヌ語の単語が取り上げられるなど、社会生活の中で少なからずアイヌ語を意識する機会があり、そうした属性③に該当する子どもが講座に応募してくるのも十分に想定できるからである。もちろん広報としては、当館のホームページや行事案内、さらには道の教育委員会が主催している「道民カレッジ」と連携しているため、博物館に何らかの興味がある人、もしくはアイヌ文化に興味がある人というのも講座参加者の前提としてはある。

(1-2) 目的

ここでは、筆者らが実施した「アイヌ語であそぼう!」の目的を、西(1999:69)があげている集団で行う博物館の活動における教育的要素に沿いながら述べて行こう。

- 1) 理解させること
- 2) 技術などを習得させること
- 3) 体験させること
- 4) 仲間作り
- 5) 団体行動や野外行動の訓練

まず、企画を検討する際に、講座参加者としてアイヌ語の言語体験がないことを想定し、博物館教育という枠組みであるため、3)を目的とした。つまり、アイヌ語の単語や文章がどういったものであるのかをブロックを通じて体験し、それを口に出して言うことで、アイヌ語を体験することに講座の主目的を置いた。そのためプログラムの中に、アイヌ語の音声聞くこと、アイヌ語をまず自分で発音して体験する要素を講座のメインに据えた。

講座の目的の中に、1) 理解させること、2) 技術などを習得させることが含まれていないとは言えないが、参加者が自身で副次的に目的としてくれたらよいという程度の位置づけとした。それはアイヌ語ブロックのコンセプトが「楽しみながら感覚的にアイヌ語の語彙や文法に親しめる」であり、理解することや覚えることを強調すると、コンセプトから離反することになると考えたからである。また、講座自体が1回限りのものであり、あくまでも応募した子どもたちの感覚としては、博物館利用の中でのことであり、1年間アイヌ語教室に通う感覚とは異なっているからでもある。もちろん小学校の小学

年ともなると、限られた単語からいくつか問題を解いていくうちに、単語を覚えてしまうこともあるが、未就学児の子どもに文法を理解したり、単語を覚えたりすることを目的にするのはハードルが高すぎるだろう。

(1-3) テーマ

西（1999：70）は、博物館の教育活動を企画する際のテーマについて次のように述べている。

博物館の立地や目的に沿ったテーマ選びが行われるが、市民のニーズがどこにあるのかにたえず注意を払い、そのことを十分に考慮することが重要である。いくら立派なテーマでも、綿密な計画が立てられても、市民のニーズを無視したもので参加者が少なければ、それは良い企画だとはいえない。

引用の後半の部分は「言語」と「博物館」の関わり方について本質的な問題を問わずにはいられないが、それは次章以降で取り上げることにして、ここでは引用の前半部分について述べて行こう。

引用中の「博物館の目的に沿った」という点であるが、前章でまとめた「I. アイヌ文化を保存・伝承し未来に活かす」は「北海道博物館基本計画」に記載されていた。そこに「アイヌ語」が含まれると考えるならば、「アイヌ語であそぼう！」もそれに沿っているとは言えるだろう。少し詳しく説明すると、大きなテーマとして「アイヌ語」を選び、文法、口承文芸のテキスト読み、アイヌ語会話といったテーマから、講座の目的である「体験すること」と照らし合わせて、入門として「アイヌ語ブロックを用いてアイヌ語で遊ぶ」をテーマとして設定したとなる。

次に「市民のニーズ」もしくは「テーマに対する関心の度合い」についてであるが、前節で触れたように、企画検討の際にあくまでも応募した子どもたちや同伴する保護者の感覚としては、博物館利用の中でのことであり、アイヌ語教室に通う感覚とは異なると考えた。つまりほとんどの参加者は、英語や中国語といった言語のように、言語習得により将来の就職や社会生活の中で実利が得られるから参加しているのではなく、異なる文化の理解や生涯学習の一環として、「アイヌ文化」に高い関心があって応募しているのだろうと考えた。この点は、次章において当館が実施した来館者調査のデータも参照する中で再度取り上げたい。

(1-4) 楽しさ

西（1999：71）は、博物館で行われる活動は、自発的な参加が基本となっていて、その魅力として楽しさの

要素を入れておくことが重要であると述べ、ゲームなどのレクリエーション的プログラムの効果として次の点をあげている。

- 1) 気分転換
- 2) 親密度を増し、和やかな雰囲気を作る
- 3) チームワークを醸成し結束力を強める
- 4) 理解力、判断力などの能力を高める

筆者らが実施した「アイヌ語であそぼう！」の場合は、アイヌ語ブロックの制作コンセプトから言っても、講座全体がゲーム感覚の楽しいプログラムにすることが肝要だと考えた。特に西（1999）が示している中でも1)と2)を強く意識し、講座進行の軸をクイズ形式とし、次のような要素を加える形でプログラムを構成した。

- ア) 講師もしくはご両親との対話
- イ) 修了証書の授与
- ウ) アイヌ語の替え歌を歌う

まずクイズシートはいわゆる「〇〇ドリル」のようなイメージである。シートにはアイヌ語から日本語、日本語からアイヌ語にする問題が書いてあり、ブロックを辞書変わりにして解いていくものである。そのためア)の講師との対話は、アイヌ語の発音を講師が指導したり、参加者の理解度を確認すると共に、親密度を高め和やかな雰囲気を出す効果も狙っている。

イ)は、講座をやり切ったという達成感を参加者や講師と共有する意図もあるが、今後自発的にアイヌ語を学んで欲しいという講師側の淡い期待を込めて行っている。

ウ)は、1年目に実施した際に、時間配分と講座の雰囲気作りに課題を感じ、小学校でアイヌ文化の出前講座を行っている人や、保育園や幼稚園での勤務経験のある人に相談して、2年目の講座から導入した。講座の最初に体を動かすとリラックスしてくれるというアドバイスを受けて、公益社団法人アイヌ文化振興・研究推進機構のアイヌ語入門のテキストにある替え歌を利用し、それに筆者が振り付けたものを講座で使用している。これは、少しでもアイヌ語の単語を覚えて帰って欲しいという講師側の願いもあるが、気分転換や和やかな雰囲気を作る効果を狙ったものである。

(2) プログラム内容

前節では西（1999）に沿いながら、講座の企画時の検討事項を追確認する形で講座の趣旨を報告した。ここでは、前節で断片的に触れたプログラム内容について報告したいと思う。これまで筆者が作成したプログラムは、館内講座を念頭においた「長時間で少人数」に対応するプログラムと、館外での講座を念頭においた「短時間で

多人数」に対応するプログラムの2種類がある。後者は、2016年8月6日にオホーツクミュージアムえさし（宗谷総合振興局管内枝幸町）で実施したものであり、館内講座をベースにしながら、いくつか変更したものである。前者と後者は進行の仕方に違いがあるため、参考として一緒に報告する。

(2-1) プログラムの前提

前節と重複するが、プログラム作成の前提となる事項を改めてまとめておこう。

①対象

- ・小学生とその保護者（募集時にその点を明記）。
- ・アイヌ語は、話す、聞くといった言語体験を有していない。
- ・言語体験もなく、アイヌ語の言語外的な情報（歴史や社会状況）も知らない。

②目的

- ・アイヌ語の単語や文章がどういったものであるのかをブロックを通じて体験し、それを口に出して言うことで、アイヌ語を体験すること。

③テーマやニーズ設定

- ・「アイヌ文化を未来に活かす」という博物館の目的に沿って「アイヌ語」というテーマを設定。
- ・博物館に何らかの興味がある、もしくはアイヌ文化に興味があるが、それは博物館利用の中でのことであり、アイヌ語教室に通うというニーズとは異なる。

④楽しさ

- ・アイヌ語ブロックのコンセプトに従って、講座全体がゲーム感覚の楽しいプログラムにする。
- ・講師もしくはご両親との対話、修了証書の授与、アイヌ語の替え歌を歌うといった要素を加える。

(2-2) アイヌ語ブロックの代用品の準備

講座を実施するためには「アイヌ語ブロック」の代用品を準備する必要があるが、どの博物館も予算の都合がある。総合展示の「アイヌ語ブロック」の代用を考える際も、安価で入手しやすく、且つ丈夫で安全であること、そして再利用できることが条件であった。そうした条件を踏まえて以下のような代用品を準備した（写真2）。

	総合展示	講座
本体	プラスチック	硬めの発泡スチロール
各面	再剥離シール	普通のシール
ブロック台	木製、またはプラスチック製	A3サイズで印刷して、パウチ加工

講座で使うブロックは、机に向かって座りながら出来

て、クイズシートを並べて机の上に置ける大きさである必要がある。インターネットで調べてみると、縦10cm×横10cm×奥行10cmのお手頃サイズの発泡スチロール製品が125個でおよそ1万円前後であったため、それを発注した。125個というのは、応募の上限が初回の2015年度は20名であったため、入替用も含め6個でひとセットという計算である。各面のシールは、総合展示のデータを使って職員実行で印刷することにしたため、ホームセンターの事務用品売り場にあるようなものを必要分だけ発注した。ブロック台の代用品は、普通のカラープリンターで必要分印刷して、パウチ加工した。

発注したものが納品されると、シールを印字して、サイズに合わせて切断して、発泡スチロールに貼るという作業が待っている。この作業は、初年度の講座に限り、シールを切るところまで準備して、講座の中で参加者に貼ってもらった。

以上のような形でアイヌ語ブロックの代用品を用意したが、問題がないわけではない。問題というのは、発泡スチロールとシールの相性である。購入したシールは事務用品であり、CDケースなどのプラスチック製品、紙製の封筒などへ貼る用途で販売されているものである。そのため、発泡スチロールに貼った場合は、粘着力が弱く1回の講座でシールが剥がれてしまう。粘着力の高いシールに変更する手段もあるが、逆に粘着力が強いため、発泡スチロールまで剥がれてしまう可能性もないわけではない。実際に粘着力の高いシールを試してはいるが、何かの機会に試す価値はありそうだと思う。現状では年1回の講座前に粘着力が弱っている部分を点検して、貼り直す形で対応している。

(2-3) クイズシートなどの前日までの準備

ブロックの準備と並行して、以下のものを前日までに準備した。プログラムのタイムスケジュールは当日の進行のところで報告することにして、ここではそれ以外について報告する。

- ・修了証書
- ・クイズシート
- ・「からだのうた 〜しずかなこはん〜」
- ・解説のパワーポイント
- ・その他必要な備品の確保
- ・プログラムのタイムスケジュール

講座が事前予約制であるため、参加者数と氏名があらかじめ把握でき、修了証書を事前に準備することが可能である。予約は約1カ月前から始まり、開始の3日前ぐらいに落ち着くので、それぐらいに予約受付の担当者から参加者の氏名を教えてもらい、データフォーマットに

入力して印刷した。印刷用紙は、一般的な賞状と同じかやや厚手の用紙を使用し、修了証書のフォーマットはインターネット上にあったフリー素材を使用した(図1)。

修了証書の準備で注意する点は、当日に参加を希望する人への対応である。この点については、30分前ならば講座を補助してくれる道民サービスグループの担当者に、速やかに教えてくれるように依頼して対応した。講座直前に参加希望者が増えると、筆者は対応できないため、手の空いている職員が対応してくれたこともあった。なお、ブロックや修了証書などの準備や講座時の対応に限度があるため、対応人数の限度を伝え、館内放送等による呼び込みは行わないように、担当者をお願いしている。

クイズシートの問題数は、何問でも構わないのだが、すべての問題に答える時間が1時間ぐらい、1問4分ぐらいとすると、練習問題1問を含め15問ぐらいが適度と考えて単文の問題を作成した。内訳はアイヌ語から日本語にする問題7つ、日本語からアイヌ語にする問題7つである(図2、図3)。なおクイズだけでなく、他にも多くの単語に触れられるように、問題番号の横に数詞を入れたり、シートの余白に動物名を入れた。

またアイヌ語に慣れてきたであろう後半では、日本語に訳して変だと思う組み合わせも意図的に入れて、理解度を確認できるようにした。具体的に言えば、名詞が「チェブ」、人称接辞が主格の「ク」、動詞が「エ」ならば、意味は「魚を私が食べる」であるが、人称接辞のブロックを目的格の「エン」にすると、「魚が私を食べる」となる。クイズシートでは、名詞の欄に「が」と「を」の選択肢があり、人称接辞の意味を考えながら回答する仕組みになっている。つまり、訳すと変であるが、人称接辞が目的格ならば名詞を「が」で訳すという、アイヌ語の特徴である人称接辞の機能が理解できているかが、回答によってわかるようになっている。別の意図として、変であるけれども、正解であることをきっかけにして、参加者を誉めて励ますような対話のきっかけになればという意図もある。

総合展示でアイヌ語ブロック用に用意した単語数は、副詞、名詞、動詞それぞれ18個あるため、講座ごとに問題が違うクイズシートを用意することも可能である。しかし現実的には毎回問題を作成して、それに合わせてシールを印刷し、発泡スチロールのブロックからシールを剥がしたり、貼ったりするのは、それなりに手間がかかる。そのためこれまで1つのパターンしか制作していない。ただし、講座においては変化がないと飽きてしまうため、途中で使用するブロックを別のものと交換して問題を解いていくように、クイズシートを作成した。従って、このクイズシートは、2回目の講座からは表紙の開

催日時を変えて印刷して綴じるだけで、準備は終了する。

講座の前後に歌う「からだのうた 〜しずかなこはん〜」は、歌詞がアイヌ語の身体名称になっていて、メロディにのせながら歌うものである。出典は公益社団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が2016年に出版した「ほろべつのアイヌご」である。幌別方言を選択したのは、アイヌ語ブロックの方言と揃えるためである。この冊子は、アイヌ語の入門として、幼児から小学生をターゲットにしている。冊子ではアイヌ語の身体部分を指す形での利用を想定しているが、講座では知人からのアドバイスを受けて筆者が簡単な振りを付けたバージョンを用意した。例えば、鼻ならばこぶしを鼻の上にあてて天狗、手ならば手を合わせて頂きます、という感じである(図4)。このレジメは使い回しが効くため、準備といっても印刷するだけである。

講座の本题に入る前の説明は、他の子ども向けの講座と大差はないと思うが、「アイヌ語であそぼう!」では以下の基本的な点を説明するパワーポイントを作成した。パワーポイントは参加者には配布しない資料である。

- ①アイヌ語はどんな言葉か
- ②日本語と違うところ
- ③文字と発音の注意点
- ④講座の進め方や回答の仕方の説明

説明の大半がアイヌ語の概説的なものであり、幼稚園や小学生にはやや難易度が高く、保護者向けの説明として用意している部分がある。内容としては、①はアイヌ語が話されていた地域、アイヌ語の周辺にある言語、言語系統などの説明、②は基本的な単語が異なることの説明、③は日本語にはない発音、アイヌ語で使用する文字などの説明である。④は「恥ずかしがらないで発音してください」、「ブロックと下に敷くシートの色は必ず合わせてください」(語順の説明)など、お願いと注意事項の説明である。

とはいえ、参加する子どもたちが感覚的に体験して理解できる形で、日本語との違いを伝える必要がある。そのため、視覚と聴覚の違いがわかるように、総合展示の第2テーマで使用しているアイヌ語の音声に合わせて日本語のテロップが流れる映像を用意した。また、「プ」「ク」といった日本語にはない発音を説明するのに、細切れの音声を流して、自分ならばどのように書くのかというクイズも用意した(図5)。その延長で発音の仕方を説明しながら、口の中がどのようにになっているのか自分で観察してもらい、「プ」や「ク」と書くとき自分が観察して、発音した音「プ」や「ク」を書き分けることができないことを説明するためのスライドも用意した(図6)。

その他に筆記用具（鉛筆、消しゴム）、持ち帰り品を入れる封筒（持ち帰り品：配付のレジメ一式、修了証書）を用意した。必須ではないが、修了証書の授与式の演出として、卒業式などで使用するようなお盆も毎回用意している。

(2-4) 当日の会場づくり

講座の当日は、参加者の机と椅子を講座用に並び変え、机に前日までに準備したものを配置した。当館の机は長机なので、基本的に長机を2つ合わせて一家族分の島とし、島と島の間は体を動かしながら歌う「からだのうた」があるため、ぶつからないよう、かなり広めにとった。ブロック一式は、もしお母さん1人、子ども2人ならば、お母さんの横に1人、前に1人と、親御さんが子どもと会話しながら補助できるように、ブロック一式を配置した。そして参加者が到着したら、人数にあわせて、適宜席に誘導するようにした。

＜会場の机に置くもの＞

- ・発泡スチロールのブロック一式（4種類）
- ・ブロックをおく下敷（A3横）
- ・クイズシート（A4横）
- ・しずかなこはんの歌詞（A4縦）
- ・筆記用具（鉛筆、消しゴム）

講師側では、パソコン、プロジェクター、音声機器、レーザーポインターなどの確認を行った。なお講座途中で渡す2種類のブロックは、混乱を避けるため、修了証書やお持ち帰りの封筒と一緒に講師側に置いておいた。

(2-5) ちゃれんが子どもクラブ「アイヌ語であそぼう！」の進行

当日のタイムスケジュールは、事前に作成し、行事運営を担当する道民サービスグループの担当者やもう1人の講師に手交した。前節で報告したクイズシートの中身などと照らし合わせれば、おおよそ当日の様子を想像できると思うので、ここでは当日の状況や注意した点などを進行に沿いながら若干の所見と共に報告していこう。

＜2018年3月3日（土）のプログラム＞

13：30 うたってはじめよう

「からだのうた ～しずかなこはん～」

13：45 説明1 アイヌ語

映像やパワーポイントを使って、発音と表記について説明

14：55 説明2 アイヌ語クイズ

アイヌ語ブロックの組み合わせ方、順番、クイズの練習（アイヌ語→日本語）
答え合わせの方法の説明の後にクイズ開始

【参加者】 ①クイズシートに回答を記入

②手を上げるまたは講師のところへ持って行く

③回答を読み上げる

④正解ならば続きを行う

【講 師】 ①参加者が読み上げるのを聞く

②アイヌ語の発音や日本語訳などを指導

③正解ならば赤丸をつける

※7問目が正解したら、追加のブロック（青・緑）を渡す。

14：45 うたっておわろう

「からだのうた ～しずかなこはん～」

14：50 修了式（修了証書授与）

【授 与】 管理職職員に依頼

【補 助】 講師

15：00 「アイヌ語であそぼう！」終了

どのような講座も、はじめは講師も参加者も緊張し、会場の雰囲気も定かではないのが一般的である。そのため、講師のあいさつもそこそこにして、配布資料の確認を済ませ、すぐに「うたってはじめよう」のプログラムに入るようにした。流れは、まず「からだのうた ～しずかなこはん～」を振り付けて歌うことを告げ、参加者がレジメを見ながら、だいたい歌えるようになるまで練習する。その後振り付けのバージョンを講師が実演し、振り付けを練習した後に、振り付けありで歌った。

「うたってはじめよう」は2年目の2016年度の講座から実施し、その時は出勤している若手職員にもお願いして振り付けの実演をした。2017年度は筆者と大谷のみで実演した。過去2回の会場の雰囲気を比較すると、若干参加者の年齢の違いもあるが、初回の方が参加者の反応がよく、楽しそうに子どもたちが実演していたように記憶している。教育理論的に裏付けが出来るのかわからないが、例えばテレビなどで歌のお兄さんやお姉さんが子どもたちと一緒にダンスをしている場面を見た小さな子どもが、映像につられて踊るのと同じ効果があったのではないかと思う。そうならば、職員に協力をお願いすると共に、同伴している保護者の方にも積極的な参加を呼びかけながら、「うたってはじめよう」を行うのが理想的なのかもしれない。

歌を歌った後にルールを説明しているが、体験やレクリエーション的な要素が多い講座においては、説明したルールがうまく機能するとは限らないのが常である。筆者らの講座では、講座の重要なポイントとしているクイズシートの答え合わせが毎回その目に合う。答え合わせは、前節の（4）楽しさや本節のクイズシートの報告で

述べたように、講師の発音を聞いて真似してやってみて、アイヌ語の発音が出来ると対話しながら導くという意図でやっている。そのため、「答えが書けたら、講師のところにクイズシートを持って来てください」（2015年度）とか、「1問解いたら手を上げてください」（2017年度）などと言ってルールを説明し、講師2人で対応する方式をとっている。

しかし実際には、年齢により能力やスピードが異なるため答え合わせの順番待ちが出たり、クイズシートには終わりが設定されているため、競争感覚で早く回答しようと答え合わせをしないまま進める子どももいる。こういった方式が最良なのか確信はないが、クイズは競争ではないこと、他の参加者もいること、順番待ちもあることなど、答え合わせのルールやお願いごとをしっかりと理解してもらえるように、講座力を鍛えるのがまず第一なのであろう。

クイズシートの練習問題を除くと、実質的な問題数は14問である。時間の想定としては1問4分ぐらいで、答え合わせも含めると、1時間で終了するぐらいだろうという想定である。しかし実際には、参加者の年齢は文字（ひらがな）を覚えただけの子から小学校高学年の子までまちまちであるから、どうしても理解力や学力に差があり、スピードに差がでてしまう。どの講座でも同じ状況は見受けられるのであろうが、「アイヌ語であそぼう！」では30分ぐらいで終わってしまった場合には、保護者と自由に問題を出し合って、「うたっておわろう」まで20分待ってもらっている。そういった子のほとんどが小学校高学年であるので、最終問題が終了したら継続助詞のカードと複文（2つの文章）の問題を配布して、親子で答え合わせをしながら進める「アイヌ語であそぼう！」のステップアップバージョンを用意するのも良いかもしれないと思っている。これは思っているだけで、毎回講座の直前までそれなりに準備で手が回らず、作成までは至っていない。

(2-6) オホーツクミュージアムえさしの講座

旧北海道立アイヌ民族文化研究センターはアイヌ語地名に関する展示会を年2回ほど北海道各地で毎年開催していた。ここで報告するオホーツクミュージアムえさし（宗谷総合振興局管内枝幸町）での「アイヌ語であそぼう！」は、北海道博物館が開館した次年度から再開したアイヌ語地名展の関連事業として企画され、全体で90分のプログラムの第一部である（55分）。

枝幸での講座は開催場所が館外であり、講座の申し込み状況の把握や最終的な参加者数の予想もつきにくい。そのため、講座募集の最大定員が20名であること、短時間でアイヌ語の説明とアイヌ語ブロックのプログラム

を実施することを考え、館内講座を基調にして、いくつか変更して実施した。以下に示したのが変更点と当日の大よその進行である。なお「からだのうた ～しずかなこはん～」は、枝幸の講座後に導入したため、実施していない。

- ①会場設営を考慮し、映像、音声、パワーポイントは使用しないで実施する。
- ②答え合わせは、講師が1人であるため保護者をお願いする。
- ③配布資料は、クイズの答えや簡単な発音の説明が書いてある大人用（図7）と、問題だけが書かれた子ども用を用意する。
- ④答えや問題にあるアイヌ語の文章は、保護者と子どもが互いに発音し合って確認し、講座の最後で講師と一緒に音読する。
- ⑤時間が短いため、問題数を減らす。
- ⑥ブロック交換は行わず、最初から名詞のブロックを2つ渡し、問題もそれに合わせて用意する。
- ⑦事前準備が必要で講座時間も短いため、修了証書の授与は行わない。

<講座当日のおおよその進行>

- 12：45 事前準備（机、椅子、ブロック、シート等の配置）
 13：00 受付
 13：30 簡単な挨拶と配布物、ブロックの確認
 13：35 アイヌ語の基本的な発音の説明（大人用の配布資料使用）
 13：45 問題の解き方と答え合せの方法について説明
 クイズ開始（全部で7問）
 14：15 全員でアイヌ語の文を音読
 14：25 終了

(3)「アイヌ語であそぼう！」の実績

これまで館内で4回、館外で1回、計5回子ども向けの講座「アイヌ語であそぼう！」を実施した。下に示したのが各講座の参加者数の実績である。講座に参加した子どもの人数は平均4.2人となり、他の継続して実施している子ども向けの講座の中で、最低の実績数である（詳しくは表7を参照）。

場所	開催日	参加者		
		子ども	保護者	計
館内	2016年1月16日	4名	5名	9名
	2017年1月21日	3名	2名	5名
	2018年3月3日	6名	4名	10名
	2019年1月12日	3名	3名	6名
館外	2016年8月6日	5名	5名	10名

2019年は子どもが3名となっているが、その中には参加を希望した大人1名が混じっている。前日までの事前予約は大人1名であったため、急遽プログラムを枝幸で実施した40分の短縮バージョンに変えて、定員20名で呼び込みを行った結果、子ども2人の参加を得た⁽¹⁾。

本章の冒頭で紹介した部分と重複するところもあるが、館内で実施した「アイヌ語であそぼう！」の開催日決定、募集人数の設定、広報に関する点を順に報告して行こう。

館内行事の開催日は、学芸部道民サービスグループの行事計画の担当者が決定している。行事組みは、おおよそ7月ごろから9月に開催する特別展示やその他の企画展示、講師が希望する開催時期、全体的なメニューのバランス、閑散期の集客などを考慮しながら行われる。「アイヌ語であそぼう！」の場合は、季節や材料に左右されないの、各年ともに特に希望は出していない。ただ2018年3月の講座だけは、担当者の判断で企画展「カムイとアイヌのものがたり」の開催期間に講座を開催することになった。

募集人数の設定は、2016年が20名、2017年が40名、2018、2019年が10名、館外講座は20名である。ワークショップ系の行事では、使用する材料や道具の都合により定員を制限することはあるが、多くの講座は30名から40名を定員としている。2018年から10名に定員を制限したのは、過去の実績および事前準備や発音指導の都合からである。

館内放送による呼びかけは、特別展示関連の講座や文化の日の講演会などで実施している程度であり、通常の講座ならば行わないのが通例である。「アイヌ語であそぼう！」も館内放送による呼びかけは行っていない。

広報については、行事担当グループの判断により開催時期が近づくとホームページや当館のツイッターに掲載したり、館内にチラシを配置したりする。こうした取り組みは開館3年目ぐらいから徐々に行われるようになってきたと記憶している。

なお、2016年のオホーツクミュージアムえさしで開催した「アイヌ語であそぼう！」はアイヌ語地名展の関連事業の一部であり、開催時期、募集人数、広報等は開催館によるところが多いため、筆者には詳細はわからない。

4 博物館の普及行事利用者のニーズとアイヌ語

前章で筆者らが実施した「アイヌ語であそぼう！」の趣旨やプログラム内容などを講座担当者の所見を交えながら報告した。ここでは、アイヌ語へのニーズについて総合展示利用者数、利用者の動向調査や面談調査、他の

講座の実績を紹介しながら考察したいと思う。

ここで言うニーズは、一般的な博物館利用者の傾向を解きほぐしながら見えて来るニーズである。ニーズと言えば、雑誌や製品といったものにアイヌ語の名称を付けたいというニーズもあるだろう。また、機会があればアイヌ語をちゃんと学習したい、地域学習や郷土紹介のためアイヌ語の地名の解釈を知りたいといったニーズもあるだろう。そうした社会的なニーズは、レファレンスや講演会の講師依頼、社会調査などによって、顕在化して見えて来るものであろう。とはいえ、本報告は博物館の教育普及行事の中の一講座について考察を行い、報告するのが目的であるため、ここで言うニーズはさまざま目的で来館した利用者が抱えているニーズの痕跡を辿っているに過ぎないことを断っておく。

なお、日常業務で上に述べたようなレファレンスは寄せられており、館全体のレファレンスの集計や業績報告などは学芸部社会貢献グループが担当している。本報告を行うにあたって実績数や内訳を参考に示せたならば、北海道博物館に向けられた社会的なニーズの大枠やアイヌ語ニーズの内容なども横断的に紹介できただろう。しかし、本報告を執筆するにあたり、レファレンス等の実績データを揃えて、整理することができなかった。筆者の準備不備と怠慢をここでお詫びしたい。

(1) 総合展示の利用者数と団体の利用

(1-1) 総合展示の利用者数の動向

2015年から2018年11月末までの総合展示利用者数の内訳を示したものが表1である。総合展示の利用者数が減少しているため、それに応じて利用者区分ごとの利用者も減少している。ただ有料の高校生が横ばいであるのに対し、無料の高校生は人数、比率共に増加している。当館の入館料の規定では、高校生は学校教育または社会教育を目的とした10名以上の団体の場合に無料となる。この差は、2020年に白老町にオープンする国立のアイヌ民族博物館の工事が始まるため、道外からの修学旅行の行く先の代替えとして当館が選ばれていることが強く影響したものであると考えられる⁽²⁾。

各利用者層の比率を見てみると、ほぼ毎年、有料が約40%、無料が約60%となっている。有料の一般層が減少傾向である一方で、他の利用者層は毎年若干の増減を示しながら推移している。「ちゃれんが子どもクラブ」に応募しそうな小学生の比率を見てみると、16.3% (2015年度)、21.5% (2016年度)、21.0% (2017年度)、20.6% (2018年度11月まで) となり、それらの平均は19.85% (20,310人) となる。有料の一般層の比率が減少傾向にある中で、小学生は2016年度からほぼ安定している。こうしたことは、子どもを持つ保護者が当館を

何らかの目的があって利用したいというニーズをおぼろげに示しているのではないだろうか。

小学校や高等学校といった学校団体の利用状況に対する分析は東（2018）でなされており、ここではそれを紹介する。表2は、旧開拓記念館からの学校団体の推移を示した東（2018）から、次のグループレクチャーやはっけんプログラムとの兼ね合いで2015年度と2016年度の実績のみを抜粋したものである。

東（2018：219）は「現在の学校団体の博物館利用者数は、旧記念館並の利用実績である」と述べた後で、北海道博物館の開館と同時にリニューアルした総合展示との関係について次のように所見を述べている。

中学校、高等学校、幼稚園・保育園、特別支援学校・学級は、リニューアル後増加傾向にあるが、小学校は減少傾向にあり、累算では旧記念館時代とほぼ変わらない利用実績である。また、増加傾向とはいっても、高等学校は微増である。学校利用の大多数を占める小学校の減少傾向は、北海道内全体の児童数減少の影響（少子化等）も考えられるが、少なくとも利用者の割合の増加とは言えない。展示リニューアルの実施と学校団体の利用促進に、相関関係は認められない。

東（2018）は展示リニューアルにより学校団体の利用が促進されていない大きな理由として、①学校側の事情、②教職員の意識、③博物館側の問題の3つを上げている。そして博物館側の問題は、総じて「学校団体の受け入れ体制や提供するサービス（教育プログラムのみならず、施設・設備を含む）の不備」にあるとしている。

（1-2）来館者調査

北海道博物館の総合展示利用者を対象とした来館者調査の報告は、これまでの『北海道博物館研究紀要』の中で2回なされている。1つは筆者も直接関わり、博物館実習の中で動向調査と面談調査を実施して、その結果を報告した栗原・田村（2017）である。もう1つは、はっけん広場も調査場所に加えて、調査結果を報告した栗原・池田・堀（2018）である。ここでは2つの報告の中から、来館した利用者のニーズをたどる上で参考になるデータを紹介する。

動向調査では両報告ともに1階の展示に比べ2階の展示の観覧時間が短いのは、来館者が徐々に展示観覧に疲れてきている、もしくは飽きていることが考えられる、と報告している（表3）。なお第1テーマは、北海道の自然史から考古、そして明治に至るまでの歴史を展示していて、スペースは総合展示の中でも最も広い。第2テ

マの平均滞在時間は約14分である。

また栗原・田村（2017）は動向調査の結果を受け、展示面積が小さく中テーマごとの計測が困難な第5テーマを除き、各テーマの滞在時間について次のようにコメントしている。

第1テーマ 「1-3蝦夷地のころ」の滞在時間が長い。

第2テーマ 来館者の属性や興味によって惹きつける場所が大きく異なっている可能性がある。

第3テーマ 「3-1自然の恵みとともに」または「3-3＜北海道らしさの＞のア・ラ・カルト」の滞在時間が長い傾向がみられる。

第4テーマ 「4-2高度経済成長の時代」の滞在時間が長い傾向がみられる。

同じ傾向は栗原・池田・堀（2018）の調査結果でも見られる。第2テーマの上のコメントに限って補足すれば、映像展示や、アイヌ語ブロック、トンコリなどのハンズオン展示を行っている「2-3ことばを聴く」は、30代や40代の家族連れの滞在時間が長くなる傾向がある一方で、年齢層が高かったり、一人での来館者は滞在時間が短くなる傾向が両報告の資料から読み取れる。

栗原・池田・堀（2018）は面談調査の自由回答で、第2テーマ「アイヌ文化の世界」の展示が印象に残ったとする意見が多かった、と報告している。同報告に掲載された資料から具体的に上げている展示の意見をひろってみると、「アイヌから今までの歴史の流れ」、「家族の会話形式のところ」、「アイヌの歴史」、「アイヌの楽器」、「アイヌの暮らし」、「アイヌの刺繍」といった内容をあげている。なお、はじめの3つは、第2テーマの「2-1現在を知る」を指していると考えられる。

（1-3）団体利用者向けのプログラム

北海道博物館では社会科見学や現地学習、修学旅行などの団体利用者向けのプログラムとして、総合展示の見どころなどを学芸員や研究職員が20～25分程度で解説する「グループレクチャー」と、はっけん広場で解説員の指導のもと、アンモナイトを観察したりアイヌ民族の衣装を着たりできる「はっけんプログラム」を実施している（いずれも事前申込制）。これらは、博物館側が用意した各テーマやプログラムを利用者（引率の先生など）が選ぶ方式で実施している。

表4は「グループレクチャー」、表5は「はっけんプログラム」の2015年度から2017年度までの利用実績である。表4からわかるとおり、学校をはじめとした団体利用者向けの「グループレクチャー」の件数は減少が著しい。表5で示した「はっけんプログラム」の件数は減少傾向にはあるとはいえ、「グループレクチャー」ほどの

落ち込みはない。また「グループレクチャー」と「はっけんプログラム」の利用者数を比較すると、その数は接近していく傾向にある。「グループレクチャー」の利用団体別のデータと照合する必要があるが、小学校の利用の仕方を見ていると、「グループレクチャー」の前か後に「はっけんプログラム」を利用する学校団体は少ない。こうしたことから、「グループレクチャー」と「はっけんプログラム」の利用者数が接近してきているのではないと思われる。なお東（2018）は旧開拓記念館時代からの累計から、小学校の利用は減少傾向にあることを示していたが、「はっけんプログラム」の利用実績はそれを補足するものであろう。

「グループレクチャー」の中で最も多いプログラムは総合展示全体の解説である。これは、団体として見学前のオリエンテーションとして簡単な解説を聞いて、それぞれがさまざまな興味や関心にしたがって、展示を自由に見学したいというニーズの現れであろう。

その次に多いのは、アイヌ文化に関するレクチャーである（2015年度、2016年度では「第2テーマ」、2017年度では「アイヌ文化の世界」）。その後に続くのは、おおむね生活、歴史、自然の順となっている。「はっけんプログラム」において、選ばれているメニューの順番はより顕著となり、アイヌ関連が突出している。これは学習指導要領の総合学習の一環として道内ではアイヌ文化が取り上げられ、学校では教材ばかりではなく、教員もアイヌ文化に対する知識が少なく、どうやって指導したらよいかわからない等の理由から当館を利用しているのだらうと思われる。

以上のことから、博物館利用者数の全体として減少している中でも、アイヌ文化を校外学習や社会科見学などのプログラムとして考えている学校のニーズは高く、当館の「グループレクチャー」や「はっけんプログラム」を利用していると推察できそうである。ただし、グループレクチャーは具体的なテーマのリクエストがあれば、対応することもできるが、リクエストの大半がアイヌ文化全般であり、アイヌ語のリクエストがあったことは一度もない。これは先に栗原・池田・堀（2018）のデータとして紹介した印象に残った展示の意見とさほど矛盾するものではない。こうしたことから、団体も含め来館して博物館を利用する人々が抱えているアイヌ民族もしくはアイヌ文化の関心や興味は、歴史、物質文化、信仰といったいわゆる「博物館」と言われてイメージする話題に集まる傾向があり、ニーズもそうした点にあることが伺われる。

(2) 講座利用者の傾向からみるニーズ

(2-1) 講座利用者のニーズ傾向

基本的に当館の講座は、特別展示の関連イベントや文化の日に開催されるアイヌ音楽のコンサートといった集客意図が強い企画を除くと、年間で40ぐらいの教育普及行事が行われている。当館ではおおむね、第1週目の土曜日に開催したら次の週は日曜日といったサイクルで講座を開催し、館内で講座に使える場所は1つしかないため、単純に計算して（1ヶ月の土日8日×12ヶ月）、毎週の土日のどちらかでイベントが開催されていることになる。ニーズがありそうでも、材料調達、会場運営などを含めた準備や参加しやすい日時の設定、さらには職員の労務管理などを含めて考慮すると、容易に開催回数を増やすことは厳しいのが現状である。

表6は2015年度から2017年度までの各普及講座の実績を、担当講師の研究分野や講座内容によって便宜的にまとめたものである。表を見ると、突出した数字や変動が激しいところがあり、傾向を見る前にその理由を順に説明したい⁽³⁾。

まず講演会の枠組みは、基本的に特別展関連は外部講師を招聘して催されるため、展示と並行して興味を持っている参加者が多かったり、知名度のある講師により実績数が高くなる傾向がある。例えば、2015年度はリニューアルオープン之年であり、特別展『夷酋列伝』で国内外の講師を招聘して講演会を数回開催したり、2017年度の『プレイボール！』では、元プロ野球選手の講演会などを開催した。

講演会以外で、特別展に関連して高い実績数を残したのは、2016年度の特別展『ジオパークへ行こう！』である。表6の内訳で子どもを対象とした「子どもクラブ」の「その他」の合計が530名となっているのがそれである。この企画では、関連行事として子ども向けの地史や自然系の体験イベントがそれぞれ催された。

その他に突出した数字を残しているのは、当館の人気講座である古文書講座が含まれているところである。古文書講座は歴史分野の職員が2名程度で分担し、連続3回の講座を2回または3回行っている。参加者は老年層が多く、毎回40名を超え、トータルの講座参加は400～600名にもなる。2015年度の「ワークショップ」、2016、17年度の「講座」の欄が600名を超えているが、そこには古文書講座の実績が含まれている。

他に変動が大きいものとして、アイヌ文化担当の職員が担当した「講座」があげられる。実績は、2015年度は開催数が1回で参加者が46名、2016年度は開催数が9回で参加者の合計が253名（平均28名）、2017年度は開催数が6回で参加者の合計が283名（平均47名）となっていて、回数と平均の変動が大きい。2017年度の平均

が前年度よりも高くなっているのは、冬の企画展「カムイとアイヌのものがたり」の関連行事として開催時期を集中させたことや、子ども用チラシを作成して、広報したことによると考えられる。一般的に展示会の開催期間に講座を集中させると、参加率が高くなるが、2017年度の実績はまさにそうであると言える。

以上のような突出した数字や各分野の実施数を勘案し、表6からある程度傾向が見えるのは、2017年度である。「子どもクラブ」、「ワークショップ」共に、自然系の担当職員が実施した行事への参加者が最も高い数値となっている。これらの行事内容は、地史担当の職員が企画したアンモナイトの解剖やレプリカづくり、自然担当の職員と一緒に館外で実施される親子参加型の自然観察会である。このことから自然系の企画は子どもを持つ保護者の関心を惹くと共に、そこに高いニーズがあることがわかる。

「子どもクラブ」においては、生活担当の職員が企画した行事は開催数2回で、90名の参加があり、1回あたりの平均で言えば自然分野と同じである。これらの行事内容は、昔の雪かき道具を使っておこなう雪のなかでの宝探しや、ところてん作りである。

「ワークショップ」では自然分野に続いて歴史分野が高い参加者実績を残している。これは考古担当の職員が実施した2回の土器づくりによるところが大きい。

「講座」については、先に説明したとおり、古文書講座が突出している。アイヌ文化担当の職員の講座は過去3年で変動があるが、2017年度の講座の中で、企画展に関連しないで行われた2回の講座で74名の参加者実績を残している。この2回の行事内容は、最新の研究成果を踏まえて、歴史や民具関連の話をする講演会形式のものである。

2016、17年度の実績を分野別にみると、自然、歴史、アイヌ、生活の順となる。総じていうならば、体験型のイベントや古文書講座など、多くの自然系や歴史系の博物館などで開催されている企画が当館においてもニーズが高い傾向があるといえる。民俗系の博物館の実態はわからないが、「子どもクラブ」の実績を見る限りにおいて、生活分野の行事に対する潜在的なニーズは低くないように思われる。

アイヌ文化に関しては次節で見ていくとして、前節で紹介した「グループレクチャー」や「はっけんプログラム」といった団体利用の実績との簡単な比較を行っておこう。団体利用ではアイヌ文化、生活、歴史、自然の順で利用数が多かった。教育普及行事は、分野による企画の立て易さや外部講師招聘、展示会との連動などさまざまな要素があり、全体の傾向と言えることは少ないが、総じて団体利用と講座利用では利用者実績が逆転し

ているとは言える。これは、参加者が自身の興味や関心によって選ぶものと、学校の方針によって選ばれるものが全く違うことを示しているのだろう。

(2-2) アイヌ文化関係の講座へのニーズ

これまで総合展示の利用者実績、来館者調査、「グループレクチャー」や「はっけんプログラム」の団体利用、講座参加者の傾向などを見てきた。それらを簡単にまとめると次のようになる。

1) 総合展示の利用者実績

- ・減少傾向の中でも、子どもを持つ保護者の何らかの理由で来館している可能性がある。

2) 来館者調査

- ・第2テーマの展示は、属性や興味によって惹きつける場所が大きく異なっている可能性がある。
- ・第2テーマの展示が印象に残ったという意見が多く、そうした方は「アイヌから今までの歴史の流れ」、「家族の会話形式のところ」、「アイヌの歴史」、「アイヌの楽器」、「アイヌの暮らし」、「アイヌの刺繍」といった内容を上げていた。

3) 「グループレクチャー」や「はっけんプログラム」

- ・減少傾向の中でも、アイヌ文化を校外学習や社会科見学などのプログラムとして考えている学校のニーズは高い傾向にある。
- ・アイヌ民族もしくはアイヌ文化の関心や興味は、歴史、物質文化、信仰といったいわゆる「博物館」と言われてイメージする話題に集まる傾向がある。

4) 講座利用者

- ・総じて、体験型のイベントや古文書講座など、多くの自然・歴史博物館などで開催されている講座は、当館においてもニーズが高い傾向がある。
- ・団体利用と講座利用ではその利用者実績が逆転している。

上にまとめた2)、3) からアイヌ文化関連の普及行事はそれなりにニーズがあることは容易に伺われるだろう。実際に、過去3年間の教育普及イベント全体をまとめた表6をみると、それなりの実績を残している。一方で、表7にまとめたように、「アイヌ語であそぼう!」に限らず、ムックリ講座や糸作り講座など、子ども向けの講座では他の講座に比べて多いとは言えない状況にある。この事実は、筆者らの講座も含め、各講座企画者が自己評価しながら企画内容や広報を念頭にした工夫などの改善の余地があるとは言える。けれども、筆者らの講座の場合には、上の2) や3) から、改善により参加者が興味を抱く講座となりえるのか、つまりそもそもニーズが

あるのかを考えてみる必要はあるだろう。

アイヌ研究グループが企画した過去3年間の教育普及行事の実績を示している表8を見ると、高い参加者実績を残しているのは、先にまとめた2)と3)のそれぞれ2つ目にまとめた事項の要件を満たしている講座であることがわかる。大谷と筆者が2015年度に実施した「アイヌ語“解説”講座」以外に、行事名に「アイヌ語」という文言が入っている講座には、併せて「物語」というキーワードが入っている。それらの講座は、アイヌ語というよりも、物語世界や日本語の翻訳からわかる世界観や信仰が前面に出た講座である。実際に2017年度には企画展「カムイとアイヌのものがたり」と連動し、そうした講座は前年度に比べ倍以上の実績を残している。

以上のことから、一般的な博物館の普及行事に対する利用者としては、グループレクチャーや総合展示の利用者が印象に残った展示として上げている内容とある程度一致していて、アイヌ文化や歴史に関する情報を得たり、自身の疑問を解決する糸口となるような、講演会や講座の開催に関心やニーズがあることが伺える。別の表現をすると、アイヌ文化に限らず、自身の教養もしくは異文化理解に資するイベントに関心がある人たちが講座に応募しているとも言えそうである。

もちろん、アイヌ文化関連に限らず、各分野によっては年齢層を絞って企画しやすい講座もあったり、材料費を要するため実施できなかったり、予備知識を要するあまり、一般参加者を対象として博物館の教育普及講座として難易度が高くなり、成立しにくい講座もあるだろう。アイヌ文化関連でも、札幌市内を始め道内で実施されているアイヌ料理体験や刺繍講座などは高い集客率があると講座の当事者から聞いたことがある。そのようなワークショップ系のイベントは当館の現状からは厳しいが、2016、2017年度の実績を見る限り、定番講座がない点で安定性は欠くものの、ここで見て来たようなニーズに沿った講座が計画されていると評価してよいだろう。

「アイヌ語であそぼう！」に戻って考えると、3章で講座内容の目的やテーマについて、語学教室に通うのとは感覚が異なり、「アイヌ文化」に関心があって応募するという想定から、学習面よりも体験面を意図した「アイヌ語であそぼう！」を企画したことを述べた。また西(1999: 68)は博物館の教育活動を企画する際には、「テーマに対する関心の度合いなども検討して、それに相応しい内容を企画すべきである」と述べていたことも紹介した。これらの点と先に見たアイヌ文化関連の実績評価を合わせて考えると、筆者らの講座が振るわなかったのは、当館のアイヌ文化関連の講座に対する利用者の期待や関心からは離れ、自然系の企画に関心がある子どもやその保護者のニーズともマッチングしない企画で

あったからである、と言えるだろう。

さらに踏み込んで言えば、2017年度は、企画展「カムイとアイヌのものがたり」の開催期間中にアイヌ語の物語に関連した講座は、民話や民間信仰など民俗系の博物館で扱うような話題を志向する利用者の興味を惹き、かなりの実績を残した。その一方で、「アイヌ語であそぼう！」も企画展期間中の開催ではあったが、筆者らの講座は言語志向の企画であったために、興味を惹かず、実績にはあまり影響が見られなかった、となるだろう。端的に言ってしまえば、この対照的な実績はアイヌ語の文法的な構造や、その特徴を知りたいというニーズは、博物館利用者の中にあまりないことを立証しているかのようではある。とはいえ、博物館利用者のニーズという前に、言語と博物館という本質的な問題に目を向ける必要があるだろう。次章ではその点について考察して行きたい。

5 言語と博物館の教育普及行事

前章では当館の利用者実績から、さまざまな傾向を読み取り、筆者らが担当した「アイヌ語であそぼう！」の実績が最低であったのは、アイヌ語へのニーズはあまりないという考察を行った。そこで、一見自明であるが、本質的な次のような問いを立て、言語学の立場から考察を加えることで、この報告の総括を行うことにしたい。

問1 言語教育と博物館教育は何が違うのか。

問2 言語問題の視野の中に博物館はあるのか。

(1) 言語教育と博物館教育は何が違うのか

言語学習と言われれば、学校で習ったり、補助教材を購入して勉強したり、単語帳を作って覚えたりするなど、自分で何らかの行動をして言語を習得していく過程を想像するだろう。では、唐突に「言語学習と博物館学習」と言われたらどうであろうか。恐らく多くの人が「博物館学習」に違和感を感じると思うが、これは言語的な直感として「博物館で学習する」の方が思い浮かび、「言語を学習する」と同じ解釈の「博物館を学習する」を導きにくいからと説明できる。一方で、学校の課外授業の文脈で「今日は博物館学習です」と言われたら、一瞬ためらいがあるかもしれないが、「博物館見学」の言い間違いぐらいに思うだけであろう。

この「博物館学習」という表現をよく考えると、博物館学関係の文献で博物館教育の目的として書かれていることに通じる部分があると筆者は思っている。それらの文献では、博物館教育の目的として、さまざまな目的をもって来館する人に対して、博物館の展示品である「モノ」を通して、参加者の自主性を踏まえ、学芸員が知的

好奇心に働きかけたり、理解を手助けすることに博物館教育の目的がある、という趣旨のことが書かれている(例えば、大堀 1999; 鷹野 2000a, b; 大沢編 2015)。さらに言えば、博物館教育の特徴として、鷹野 (2000a: 80) が以下のように述べている点もあわせて考えると、「博物館学習」(＝博物館で学習する)が「博物館教育」の概念を言い表していることがわかるだろう。

博物館資料つまり「もの」と博物館の利用者「ひと」を結び付ける活動が教育活動であり、その間に立つ、つまり学校教育での教員にあたる役割を果たすのがもう一つの「ひと」、学芸員である。

やや比喩的に言語教育と博物館教育の違いを見てきたが、言いたいのは、一義的には「言語」は取得を目的として学校などで教員から教育を受けたり、自主的にテキストなどで継続的に学習する「対象」、「博物館」はさまざまな目的を持つ利用者に対して、展示物などの資料をととして、学芸員が好奇心に働きかけたり、理解を手助けする「場所」、という点である。言うまでもないが、「学芸員」の資格認定における試験科目の中に、言語教育に携わる人たちが専攻する言語学、英語学、日本語学等はいっていない。

ここでひとつ、引用で「もの」または博物館資料とあった点に注意して、言語と博物館について少し見ていきたい。

例えば、50年前のある地域のことばを録音で聞きたいと思ったり、ドラマや演劇の台詞で使う方言を教えて欲しいと思ったら、どうするだろうか。2018年はカーリング女子の「そだねー」が流行語大賞を受賞し、この時はある大学の研究者がテレビ局のインタビューに答えていたが、当館に同じような北海道方言についての問い合わせが寄せられることがたまにある。そうした場合は、北海道方言を研究している職員は当館に在籍していないため、北海道出身者が自身の経験や辞書を片手に答えているのが実情である。また組織統合により、旧道立アイヌ民族文化研究センターが所蔵していた音声資料が北海道博物館に移管され⁽⁴⁾、それを聞きに来る人もいるが、実質的にはあまり多いとは言えない。

では、日本語方言話者で、ごく普通のサラリーマンだった親が亡くなり、たまたま遺品を整理していたら、他愛もない会話の録音テープが出て来たとすると、博物館に寄贈し、保管して欲しいと思う人はどれだけいるだろうか。寄贈者が筆者のような「言語屋」だったら、将来学術的な価値があるから、是非博物館で保管して欲しいというかもしれない。ただ筆者は博物館に勤務して4年経つが、そうした寄贈依頼の書類は見たことがない。

実情としては資料として、テープに録音された方言資料を集めている博物館も、そこに資料を寄贈する方も稀有であろう。

実際に博物館に対してある方言話者の録音テープの寄贈依頼があったら、方言担当の研究者が対応するのであるが、当館のように担当者がいない状況ならば資料審査もままならないことが容易に想像できる。そのためかはわからないが、基本的には言語に関する調査ノート類や音声資料は博物館の表立った収集対象とは考えられていないようである⁽⁵⁾。

今述べた現状は、言語の観点からすると、国策の中で日本国内にある地域的・階層的なことばの違いをすべて解消し、「国語」と称する言語の近代化が行われた⁽⁶⁾。その結果、方言に対する消極的な認識が暗黙裡に言語集団の母体(話者集団)で共有され、方言資料の保存のために資料を博物館が調査収集したり、寄贈を受けるという発想も芽生えなかった。そのため、博物館に方言を扱う職員を配置することなく今に至り、必要時に駆け込み寺のように博物館に問い合わせが来ることもある、というのが現在の状況であると捉えられる。もちろん国の機関としては国立国語学研究所があったり、市町村の教育委員会などで方言の語彙集を刊行しているところもある。しかし『全国博物館園職員録(平成28年)』を見た範囲で言えば、方言を研究している職員を配置している博物館はほぼ皆無のようである⁽⁷⁾。

以上をまとめると、言語教育と博物館教育の次元で言うならば、対象者(限られた学習者と不特定の来館者)、目的(言語習得と理解の手助けや興味への働きかけ)、教育素材(教科書とモノ)、学習期間(継続と不継続)など本質的な違いが多々ある⁽⁸⁾。また少なくとも日本の博物館においては、収集する資料や実施事業の中に、言語そのものは含まれず、博物館利用者も同じ認識を持っているとまとめられるだろう。これらの点から講座「アイヌ語であそぼう!」を評価するならば、博物館が言語資料を収集したり、言語教育を施す場であるという認識が社会全体として共有されていない中で、教育目的や性質が異なる言語教育を博物館利用者に対して企画した講座となるだろう⁽⁹⁾。

(2) 言語問題の視野の中に博物館はあるのか

これまで言語教育と言った場合、日本語の母語話者であり、日本の学習指導要領にある「国語教育」と「英語教育」を受けてきたことを前提としてきた。昨今、外国人労働者の受入に関するニュースが取り上げられると、労働時の問題として日本語力がしばしば取り沙汰される。そこでは外国人労働者その人のみに注目が集まるが、日本在住が目的でその配偶者を呼び寄せ、そこに子どもや

両親がいる場合もあるだろう。そうしたことも含め、今のこの国の言語問題を俯瞰すると、グローバル化により世界的な共通語の地位を実質的に得た英語教育やそれと並行して、読解力などの国語教育の問題が取り沙汰される一方で、留学生や外国人労働者が話す母語や日本語教育など多言語社会に対する問題が現実化しつつある⁽¹⁰⁾。また国内にある固有の言語は、日本の近代化により生み出された「国語」という概念の元で周辺に押しやられたアイヌ語や沖縄方言などが今危機に瀕しているとなるだろう⁽¹¹⁾。

言語学では、社会的な言語問題を議論する際に「言語政策」や「言語計画」という用語を使う⁽¹²⁾。「言語政策」を実施するのは、小さなコミュニティであれ、権力を有する為政者であり、どういった言語を公用語にするかななどの地位を決め、標記化、表記法、新語などの各種の整備を行い、それを普及するための教育などの各種事業が行われる（カルヴェ 2000）⁽¹³⁾。先にまとめた外国人労働者や留学生の言語問題に対処する省庁は、被日本語母語話者に日本語を教えるのだから、文部科学省が中心的な役割を果たしていると思うだろうが、実際は経済産業省、外務省など各省庁に分散していて、言語政策を総括する法律や官庁は、現在のところ設立されていない（田尻 2010参照）。

歴史的にアイヌ語に対する政策は、アイヌ民族が社会生活の中で使用する言語をアイヌ語から日本語へシフトさせる言語における同化政策を学校教育の「国語」の科目で推し進めることであった（小熊 2000）。それが達成されると一般の国民が受ける「国語」教育に合流した（高倉 1972；小川 1997）。総じて言うならば、言語政策の対象者が多数者であるために、重要な課題であった沖縄とは違い、少数者であったアイヌ語の場合は、あくまでも本州から移住してきた日本語母語話者への「国語」教育の範疇で政策が進められたと言える（小熊 2000）⁽¹⁴⁾。

それでは現在のアイヌ語に対する政策はどうであろうか。現在の「国語」教育や日本語教育などの言語政策を統括する国家機関がなく、担当機関が分散していることは先に紹介したとおりであるが、同じ事情はアイヌ語にも当てはまる。ただし、言葉の枠組みではなく、むしろ「アイヌ文化」の括りで扱われる。例えば、1997（平成9）年7月1日に施行された「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律（アイヌ新法）」は、アイヌ文化の振興やアイヌの伝統等に関する国民に対する知識の普及及び啓発を目的として制定されたが、条文に「アイヌ語」が見られるのは、第二条の定義の文言だけである⁽¹⁵⁾。

（定義）

第二条 この法律において「アイヌ文化」とは、アイヌ語並びにアイヌにおいて伝承された音楽、舞踊、工芸その他の文化的所産及びこれらから発展した文化的所産をいう。

法律上、国土交通大臣と文部科学大臣が基本方針を定め、政令により指定された北海道が計画を定めている。その計画の中には、カルヴェ（2000）の言うところの、言語間のステータスを決める地位計画（ステータス計画）、表記法や新語、借用語といった本体計画（コーパス計画）に関する文言はなく、無造作な普及計画の文言があるのみである⁽¹⁶⁾。アイヌ新法の第七条により業務を行う法人として「アイヌ文化振興・研究推進機構」が指定され、筆者もいくつかの事業に携わった経験があるが、正直なところ、アイヌ語に対する戦略的な計画がない中で講師や委員を依頼されて、講座企画や成果物を作成した印象が強く残っている。

さて、当館であるが、田村・出利葉（2016）や本報告の冒頭で「北海道博物館基本計画」として紹介したとおり、基本方針の中の1つに「アイヌ文化を保存・伝承し未来に活かす博物館」という文言がある。さらに、アイヌ文化のさらなる調査研究の充実を図るために、有形文化に研究の軸がある北海道開拓記念館と言語や芸能といった無形文化に研究の軸がある北海道立アイヌ民族文化研究センターとの統合を検討する、というような表現がある。しかし、アイヌ語やその普及という文言は1つも見られない。この「基本計画」は言うまでもなく「博物館」の計画であるが⁽¹⁷⁾、あえて言語の視点で評価するならば、アイヌ語を「アイヌ文化」の括りで扱うようなそぶりだけを宣言した計画であると評価せざるを得ない。

以上、2つの例を「言語政策」と言う観点から見てきた。総じて言うならば、良し悪しは別として学習指導要領の中で英語や国語教育が議論されるのに比べて、「言語問題」の当事者として自分自身も関係するという認識が希薄な中で、「アイヌ文化」の括りで「アイヌ語」を扱っているに過ぎないと思えてならない。こうした言語問題に対する姿勢は、成長過程で自然に習得した地域共通語である母語（または方言）を材料として言語や文化に対する理解や認識を育む学習機会に出会うことなく、長年施された「国語教育」や「英語教育」によって形成された言語観によるところが大きいと筆者は推察している⁽¹⁸⁾。

博物館に戻って考えるならば、「モノ」を展示したり、保存し、資料を活用して教育活動を行う博物館のロジックに、「アイヌ文化」の括りでもって、「モノ」ではない「ことば」を安易に組み込む現象が昨今起こっている。

これは、「アイヌ文化の理解にはアイヌ語が欠かせない」という異文化理解の1つの側面として正しいが、「ことば」に視点を移した場合、「言語政策」や「言語計画」といった言語に関する本質的な問題は踏み込まない、という風潮が漠然とした言語認識のもとで流れている感が否めない。

そうした博物館のロジックや言語観の結果として、本報告で述べたようなニーズに合わず参加者も低調な講座をただ事業として実施する実態に至っているのではなかろうか。つまり、本来ならば全体的な「アイヌ語政策」または「アイヌ語教育」の中で、必要な研究や分析を実施し、各種の整備を行う。そして、アイヌ語の普及計画やその方法、さらに指導方法を議論した上で、数ある施設の中でも「モノ」を扱う博物館で効果があると判断された事業を実施するのが理想であろう。しかし実態は何もないまま、アイヌ語を「アイヌ文化」（または異文化理解）で括って博物館の現場に丸投げし、参加者数が低調で現場をただ困惑させているだけである。これが4年間の講座を開催してきた率直な思いである⁽¹⁹⁾。

この節は「言語問題の視野の中に博物館はあるのか」という問いを立てた。最後にその問いに答えるならば、言語問題の視野の中に博物館という施設が入るかどうかは、基本的には「言語政策」と「言語計画」による、となる。本章であげた例で言うならば、外国人労働者や留学生に対する日本語教育の問題に対して、生涯学習や社会福祉といった観点で博物館にその役割が期待される状況となった場合や、方言の継承という社会的な機運が高まり、市民団体から活動拠点としての要請があった場合を想像すれば理解できるだろう。この想定自体があくまで想像の域を出ないとしても、外国人の来館者や手話話者への対応基準が策定されたならば、所管の省庁などから通達があるのが通例であろう。であるならば、アイヌ語についても、「モノ」を扱う博物館の特性を生かして、どういった活動を期待し、アイヌ語復興の道筋に関与するのかをしかるべき機関が示さなければ、いくら博物館の「アイヌ文化」の括りでアイヌ語の講座や講演会も企画しても効果が発揮されないのではなかろうか⁽²⁰⁾。

6 おわりに

本報告では、実績からアイヌ語へのニーズを探ろうとしてきた。そうした姿勢に対し、展示会の来館者数のように即時的なわかりやすい数字に注目して、評価が下される実績主義的な立場であると思う人もいるかもしれない。仮に、「アイヌ語であそばう！」に対して実績主義的な立場や、または先に引用した西（1999：70）のような博物館学の立場にある人が評価するならば、参加者

のニーズに一致していない、内容の再検討もしくは講座の廃止が適切である、と酷評されるかもしれない。実績主義的な立場をとらないならば、アイヌ文化を知る上でアイヌ語は欠かせない、もっとアイヌ語の講座をすべきだ、と実績評価よりもアイヌ文化の啓発的な側面や異文化理解を強調する人もいるかもしれない。

だが、これまで筆者はどちらの立場にもよらず、博物館の講座参加者の関心からアイヌ語の社会的な現在地を押さえるために、他の講座との比較や、言語教育と博物館教育の違い、さらには言語問題について中立的に考察するように努めてきたつもりである。ただ、筆者の準備不足により、当館に寄せられるレファレンスや講師依頼から社会的なニーズの分析までは至らなかった。その分析が加わったならば、先にあげた2つの立場をつなぐ館内行事に限定されないモデルを構築していく手がかりを考察できたかもしれない。そうした議論は、筆者の得意とするところではない。社会教育や博物館学を専門とする識者に委ねたい。

本報告の執筆にあたっては、言語学を専攻し、博物館に勤務したからには、せめて博物館に来館した利用者が抱いているニーズの痕跡をまず探り、博物館活動に寄与するような報告を作成すると共に、当館の状況を1つの言語問題の事例として社会に還元するのは責務であろうと考えて執筆した。とはいえ、筆者の見識不足による誤りや考察の物足りなさが多々あることは承知している。しかしながら、少しでも過去のこの国の言語政策や現在直面しているさまざまな言語問題に関心を広げながら、アイヌ語の問題について考えるきっかけとなったならば、この報告の趣旨は達せられたと思いたい。

註

- (1) 講座当日の総合展示室への入館者は401名、企画展示室は668名である。この数字は夏季に催される特別展示の土日の来館者数にほぼ匹敵する。今回、企画展示室では国立科学博物館の展示キットを使用した展示会「生命のれきし」にあわせた特別イベント「アロサウルスになってみよう」が同じ時間帯に開催されていた。この展示会とイベントは、1年間の教育普及行事や展示計画が決定された後に、決定した経緯がある。入館者実績を優先させた館の意思決定が、奇しくも2つのイベントの明暗を分けたと言える。こうした意思決定は博物館運営の宿命かもしれないが、来館者が抱く参加意識に大きく影響をあたえ、職員のモチベーションも低下させる。さらには職員間の軋轢や意思決定への不信や不満を生じさせかねない。計画決定の課題と共に教訓としたい。
- (2) 旧アイヌ民族博物館は2018年3月31日に閉館した。実感としては、2017年、2018年はアイヌ文化のグループプレクチャーを担当する回数が増え、特に道外から修学旅行の高校生が目立って多かった。
- (3) 当館の教育普及行事は、北海道教育委員会が主催してい

- る「道民カレッジ」と連携している。館内で講座ごとに作成される報告書には道民カレッジの参加者数も記載されているが、今回の報告では道民カレッジの参加者数はなくとも差し支えないと判断し、公刊された要覧のデータを主に使用し、「ちゃれんが子どもクラブ」の内訳のみ館内の講座ごとに作成される報告書を参照した。
- (4) 旧道立アイヌ民族文化研究センターの音声資料はおおきく3つに分けることができる。1つめは、アイヌ語地名研究の権威である山田秀三氏が採録した資料、2つめが主にアイヌの口承文芸を研究した久保寺逸彦氏が採録した資料である。3つめは、1990年代後半から2000年代にかけてアイヌ語が話せる方々から、職員が物語や歌などを採録した資料である。この内、久保寺氏の資料は、おおよそ50年前に北海道教育委員会の事業で採録された資料があることを田村（2018）で紹介した。
- (5) 2011（平成23）年に告示された「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」の「第五条 資料の収集、保存、展示等」では「博物館は、実物、標本、文献、図表、フィルム、レコード等の資料（以下「実物等資料」）について、その所在等の調査研究を行い、当該実物等資料に係る学術研究の状況、地域における当該実物等資料の所在及び当該実物等資料の展示上の効果等を考慮して、基本的運営方針に基づき、必要な数を体系的に収集し、保管（育成及び現地保存を含む。以下同じ。）し、及び展示するものとする。」とされている。この条文を、方言調査のノートやその録音資料、研究分野としての「言語」を頭に浮かべながら順に読んでいくと、後半にいくにつれ、乖離が激しくなると思うのは筆者だけであろうか。
- (6) 日本の近代化の中で「国語」という名称が背負った歴史や形成過程についてはイ（1996）、安田（2006）を参照されたい。
- (7) 「博物館」と「言語」については、現行の各種法律の対比、さらには国の言語機関や博物館の歴史的な経緯の概観を紹介すべきだろうが、筆者のにはその力はない。言語関連についてはイ（1996）、安田（2006、2010）を参照されたい。博物館関係の法規関係については、「博物館法」、「博物館法施行規則」を参照したこと、館内にあった黒沢編（2015）、守井（1997）を博物館教育という範囲ではあるが歴史的な経緯として参照したことをここで断っておく。
- (8) これらの違いは、黒沢編（2015）を参照しながら、便宜的にまとめたものである。
- (9) 大津（2010）は、英語教育や日本語教育が連携していく基盤として「教育文法」を主張している。「教育文法」とは、言語学習の知識を身につけるために提供される材料という意味で、「母音」と「子音」といった音声学の概念や、「主語」と「目的語」、「動詞」と「名詞」、「主格」と「対格」などいわゆる文法記述で使用する概念を指す。3章で報告したように、アイヌ語ブロックもそうした概念を体験的に感じたり、気づいたりできるように、不十分ながら工夫してきたつもりである。これは、ただアイヌ語を理解するだけではなく、日本語や英語の文法的な違いに気づくためのきっかけ作りであり、博物館の教育活動と近いと思っている。
- (10) ここで話題にあげた問題については、大津由紀雄編『言語政策を問う！』（2010年、ひつじ書房）にある各著者の論考が大変参考になる。
- (11) ユネスコ（国連教育科学文化機関）が平成21年2月に発表

- した“Atlas of the World's Languages in Danger”によると、日本国内で消滅の危機にある方言・言語は8つある。アイヌ語は「極めて深刻」な言語、その他に八重山語（八重山方言）や沖縄語（沖縄方言）などが「重大な危機」、「危険」と認定されている（<http://www.unesco.org/languages-atlas>）。もちろんユネスコの発表に限らず、各地域の方言も考えるべき言語問題の1つである。
- (12) カルヴェ（2010：165）は、言語政策を「言語と社会生活、とりわけ言語と国民生活の関係について行われる意識的な選択の総体」、言語計画を「言語政策の執行のために必要な諸手段の探求および実行」とそれぞれ定義している。
- (13) カルヴェ（2000：16）は少数者集団もある言語政策を決定することができること前置きした上で、言語政策の決定は政治的選択を実現する権力と方策をもっている国家や国家内部の自治権を持った集団に限られた問題だとしている。ここで、ある企業が社内公用語を定めたニュースや手話条例を定めた自治体のことなどを想起される方もいるだろう。それらも言語政策であるが、ここにおける主旨はカルヴェ（2000）の範囲で理解されたい。
- (14) アイヌ民族に対する教育制度の中で「旧土人児童教育規定」が廃止（1922年）された経緯や、当時のアイヌ民族の生活状況については小川（1997）を参照されたい。また同時に、日清戦争（1894年）や日露戦争（1904年）を通じて植民地が拡大したのに呼応して、「東亜共通語」や植民地統治における「日本語」といった問題が当時論じられていたもあわせて注意されたい（詳しくは安田（2006）を参照のこと）。
- (15) 同法律の第五条には「国土交通大臣及び文部科学大臣は、アイヌ文化の振興等を図るための施策に関する基本方針を定めなければならない」とあり、国土交通省も所管に入っている。
- (16) 「基本計画」はアイヌ政策推進局アイヌ政策課のホームページに掲載されている（http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/new_sinpou3.htm）。「推進施策」においてアイヌ語の文言は2カ所に見られ、「アイヌ語指導者や話者（中略）の育成」（1アイヌ文化の保存・伝承、（2）伝承活動の支援）、「アイヌ語に親しみ学習する機会や発表の場の提供」（2アイヌ文化の確保、（1）体験学習機会の充実）、とある。なお「アイヌ語話者の育成」とあるのは本体計画ばかりではなく地位計画にも関わることであり、「個人の言語（日本語、アイヌ語）に対する権利（言語権）」の問題として注意したい。この問題は現在アイヌ語を学習している人や機会があればと思っている人たちを始め、現在から将来のアイヌ語の言語状況に介入するデリケートな問題であるだけに、長期的な視点で丁寧に各計画を議論する必要があると筆者は考えている。
- (17) 北海道博物館の設立までの経緯等については、『北海道博物館要覧2015』の別添資料「北海道博物館の開館準備に関わる事業」を参照のこと。
- (18) ここで言う言語観とは、さしずめ「言語はコミュニケーションの手段であり、グローバル化に対応した英語が使える日本人を育成せよ」という考え方を指し、英語の学習指導要領に対して識者らが批判の声を上げている考え方を指す（大津 2010；鳥飼 2018）。
- (19) こうした現状から、「グローバル人材の育成のため使える英語を」と長年の要請してきた経済界や、それに応じて改革されてきた学習指導要領で混迷を深める英語教育やその現場にいる教員について共感してしまう（大津 2010；

鳥飼 2018参照)。邪推が過ぎるかもしれないが、同じような経済志向の論理によって、アイヌ文化の括りでアイヌ語の問題を博物館という文化施設内で扱えばよい、というの認識が見隠れする。日本語とアイヌ語の政策的な扱いは言語の地位による違いではあるが、どちらも現場に丸投げしていることには変わりはないのではなかろうか。

- (20)筆者は早急にアイヌ語の言語政策の議論を開始することよりも、今あるさまざまなこの国の言語問題を認識し、言語政策や言語計画といった概念が啓発されていくことがまずは必要ではないかと考えている。そしてその中で、アイヌ語については言語政策なき事業で数値化された目標やその実績を求めるのではなく、自主的な学習機会を扶養しながら、学習意欲を継続できるような、必要な要素を整備していく必要があるのではないだろうか。もちろん北海道大学アイヌ・先住民族研究センターが行ったような実態調査(『北海道アイヌ民族生活実態調査報告1〜3』)を重々に踏まえながら、個人が言語を選んで使用する権利やアイヌ語の地位、造語や新語といった議論を丁寧かつ慎重に行うことも必要である。

参考文献

- 東俊佑 2018. 北海道博物館におけるワークシートの開発と学校利用. 北海道博物館研究紀要 3: 219-252.
- 北海道博物館編 2017. 北海道博物館要覧2015.
- 北海道博物館編 2018. 北海道博物館要覧2016・2017.
- イ・ヨンスク 1996. 「国語」という思想—近代日本の言語認識. 岩波現代文庫.
- 公益社団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2016. ほろべつのアイヌご. 同法人発行.
- 公益財団法人日本博物館協会編 2016. 全国博物館園職員録(平成28年). 同法人発行.
- 栗原憲一・田村雅史 2017. 2016年度博物館実習において実施した来館者調査について. 北海道博物館博研究紀要 2: 121-132.
- 栗原憲一・池田貴夫・堀繁久 2018. 来館者調査からみる北海道博物館の総合展示室およびはっけん広場の現状と課題. 北海道博物館博研究紀要 3: 201-218.
- 黒沢浩編 2015. 博物館教育論. 講談社.
- 西源次郎 1999. III博物館活動のプログラムの構成 2企画検討事項. 加藤他編. 生涯学習と博物館活動. 雄山閣出版: 68-77.
- 小川正人 1997. 近代アイヌ教育制度史研究. 北海道大学図書刊行会.
- 守井典子 1997. 第6章博物館教育論. 大堀哲編. 博物館学教程. 東京堂出版: 131-153.
- 大堀哲 1999. I 博物館教育活動の目的と意義 1博物館と教育. 加藤他編. 生涯学習と博物館活動. 雄山閣出版: 3-10.
- 小熊英二 2000. 日本の言語帝国主義 アイヌ、琉球から台湾まで. 三浦信孝・糟谷啓介編. 言語帝国主義とは何か. 藤原書店: 55-65.
- 大津由紀雄 2010. 言語教育の構想. 田尻・大津編. 言語政策を問う! . ひつじ書房. 1-31.
- ルイ＝ジャン・カルヴェ 2000. 言語政策とは何か. 白水社文庫クセジュ.
- ルイ＝ジャン・カルヴェ 2010. 言語戦争と言語政策. 三元社.
- 田尻栄三 2010. 日本語教育政策・機関事業仕分け. 田尻・大津編. 言語政策を問う! . ひつじ書房: 51-102.
- 田尻英三・大津由紀雄編 2010. 言語政策を問う! . ひつじ書房.
- 鷹野光行 2000a. III博物館学各論(1)—博物館の倫理学— 博物館教育学. 加藤他編. 博物館学概論. 雄山閣出版: 79-82.
- 鷹野光行 2000b. IV博物館学各論(2)—博物館の実践論— 博物館教育活動法. 加藤他編. 博物館学概論. 雄山閣出版: 129-134.
- 高倉新一郎 1972. 新版アイヌ政策史. 三一書房.
- 田村雅史・出利葉浩司 2016. 北海道博物館における言語展示への試み—総合展示第2テーマに設置した「アイヌ語ブロック」を中心に—. 北海道博物館博研究紀要 1: 127-148.
- 田村雅史 2018. あれから50年—久保寺逸彦最晩年のしごと—. 森のちゃれんがニュース 第13号. 北海道博物館: 2.
- 鳥飼玖美子 2018. 英語教育の危機. ちくま新書.
- 安田敏朗 2006. 「国語」の近代史—帝国日本と国語学者たち—. 中公新書.
- 安田敏朗 2010. 日本語政策史から見た言語政策の問題点. 田尻・大津編. 言語政策を問う! . ひつじ書房: 133-147.



写真1 総合展示室内にあるアイヌ語ブロック



写真2 講座用のアイヌ語ブロック



図1 修了証書

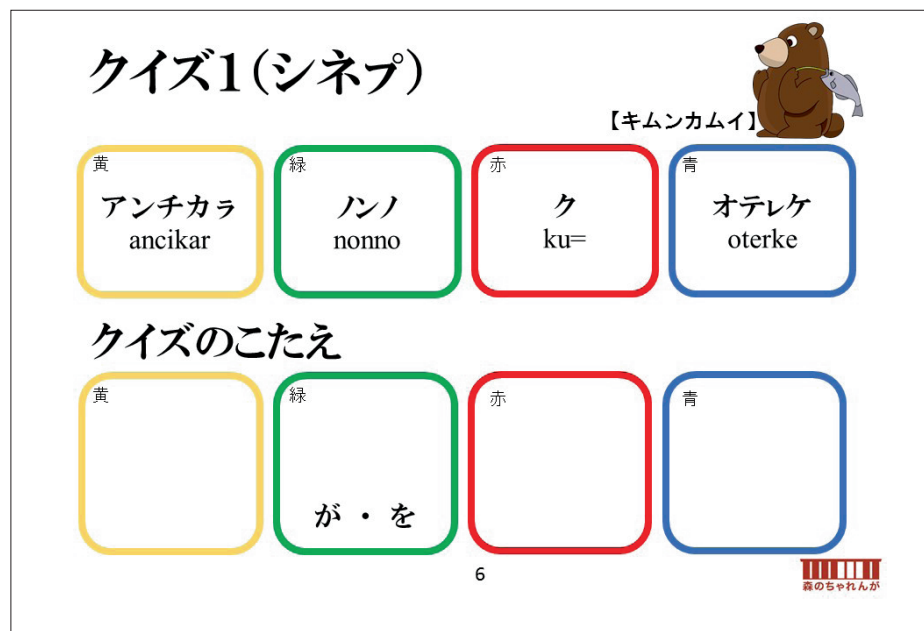


図2 クイズシート【アイヌ語→日本語】

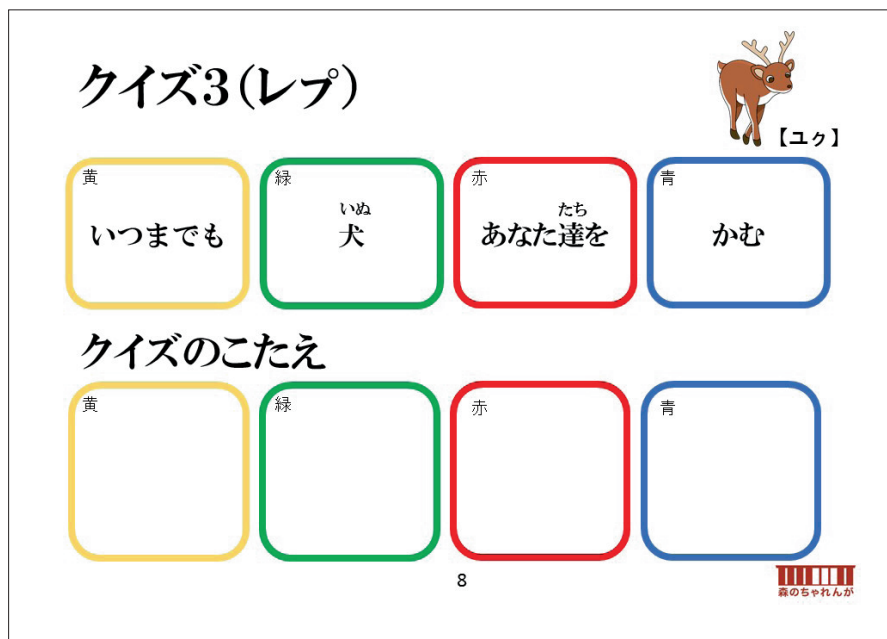


図3 クイズシート！【日本語→アイヌ語】

からだのうた（メロディ：しずかなこはん）				
アイヌ語	サバ	エトウ	シキ	パロ
意 味	あたま	はな	め	くち
振り付け	両手でおおう	てんぐさん	めがね	しー
アイヌ語	キサラハ		ナヌフ	
意 味	みみ		かお	
振り付け	耳が大きくなっちゃった		わたしかわいい？	
アイヌ語	オトピヒ		レクチ	
意 味	かみのけ		のど	
振り付け	かみの毛さー		のどをなでなで	
アイヌ語	テケヘ		ホニヒ	
意 味	て		おなか	
振り付け	いただきます		両手をお腹に	
アイヌ語	コツカ		ウレ	
意 味	ひざ		あし（あしくびからさき）	
振り付け	ひざなでなで		あしくびなでなで	
アイヌ語	チキリヒ		オソロ	
意 味	あし（ぜんぶ）		おしり	
振り付け	下から上へさー		おしりをぽん	
※1「ナヌフ」の2回目は、自由に誰かに向かってアピール（変顔OK）				
※2「オソロ」の2回目は、ジャンプしてお尻をぺん				

図4 からだのうた

発音の練習をしよう！

§ 問題1 音を聞いて自分で書くならどうする？

①チカ ②チカッ ③チカップ ④チカッ

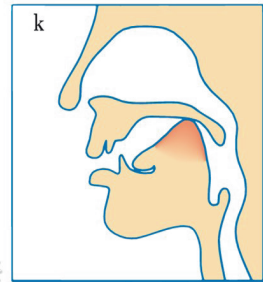


答:④ ローマ字ではcikapと書きます。

発音の練習をしよう！

答3 三番目の発音／サksak「夏」

- ・「サksak」は、「サ」の後に横の図のような口の形をしたところで止めます。
- ・「サッカー」を「サッ」で止める感じで、舌の奥で舌をふさぎます。
- ・「クku」と「ウu」と発音してはいけません。



14

図5 発音練習[cikap]

図6 発音[k]

クイズ5(アシクネプ)

【チロンヌプ】



黄 アンチカラ	緑 タロウ	赤 ク	青 オマンテ
------------	----------	--------	-----------

クイズのこたえ

黄 夜に	緑 太郎 が・(を)	赤 私が	青 行かせる
---------	------------------	---------	-----------

クイズ6(イワンペ)

【モユク】



黄 いえ 家で	緑 太郎 (が)・を	緑 なべ 鍋 が・(を)	青 あら 洗う
---------------	------------------	-----------------------	---------------

クイズのこたえ

黄 チセ オッタ	緑 タロウ	緑 ス	青 フライエ
-------------	----------	--------	-----------

小ー3

図7 クイズシート枝幸版【大人用】

表1 2015年から2018年11月末までの総合展示利用者数の内訳 ※ () の中は年度ごとの比率

年 度		2015年	2016年	2017年	2018年 (11月末まで)
開館日数		290	305	304	206
有料	一般	60,500 (40.6)	39,501 (36.4)	27,212 (33.8)	26,630 (32.8)
	大学生	4,081 (2.7)	3,848 (3.6)	3,663 (4.5)	3,255 (4.0)
	高校生	300 (0.2)	263 (0.2)	189 (0.2)	150 (0.2)
	小計	64,881 (43.5)	43,612 (40.2)	31,064 (38.6)	30,035 (37.0)
無料・免除	小学生	24,234 (16.3)	23,317 (21.5)	16,937 (21.0)	16,751 (20.6)
	中学生	4,909 (3.3)	4,667 (4.3)	3,608 (4.5)	3,793 (4.7)
	高校生	2,867 (1.9)	2,664 (2.5)	3,458 (4.3)	5,148 (6.3)
	視察者	1,712 (1.1)	797 (0.7)	592 (0.7)	599 (0.7)
	65歳以上	28,928 (19.4)	15,334 (14.1)	11,305 (14.0)	14,941 (18.4)
	心障者	5,013 (3.4)	2,451 (2.3)	1,927 (2.4)	1,770 (2.2)
	その他	16,502 (11.1)	15,532 (14.3)	11,628 (14.4)	8,218 (10.1)
小計		84,165 (56.5)	64,76 (59.8)	49,455 (61.4)	51,220 (63.0)
計 (人)		149,046	108,374	80,519	81,255
内外国人		3,301 (2.2)	4,417 (4.1)	4,836 (6.0)	3,480 (4.3)
解説器 (台)		726 (0.5)	442 (0.4)	621 (0.8)	644 (0.8)

表2 2015年、2016年の学校団体の利用者数 (東2018より抜粋)

年度		2015年	2016年
小学校	団体件数	202	200
	引率者数	848	1,216
	被引率者数	12,008	11,810
	合計	12,856	13,026
中学校	団体件数	46	57
	引率者数	232	316
	被引率者数	2,543	3,391
	合計	2,775	3,707
高等学校	団体件数	26	36
	引率者数	155	224
	被引率者数	2,540	2,483
	合計	2,695	2,707
幼稚園・保育園	団体件数	13	23
	引率者数	94	111
	被引率者数	451	887
	合計	545	998
特別支援学校・学級	団体件数	36	16
	引率者数	167	81
	被引率者数	372	161
	合計	539	242
合計	団体件数	323	332
	引率者数	1,329	1,867
	被引率者数	17,542	18,571
	合計	18,871	20,438

表3 栗原・田村 (2017) と栗原・池田・堀 (2018) の動向調査で報告された各テーマの滞在時間

	栗原・田村 (2017)			栗原・池田・堀 (2018)		
	平均	最小値	最大値	平均	最小値	最大値
プロローグ	2.4 分	1分	9分	2分	0分	5分
第1テーマ	35.7分	11分	73分	25分	10分	54分
第2テーマ	14.3分	8分	41分	14分	0分	28分
第3テーマ	10.8分	5分	20分	9分	6分	24分
第4テーマ	4.6 分	1分	13分	5分	2分	15分
第5テーマ	3.3 分	1分	16分	7分	0分	25分

表4 学校団体等を対象とした総合展示の「グループレクチャー」の推移（当館要覧2015、2016・2017を参照）

年 度		平成27年	平成28年	平成29年
件 数		254	173	137
人 数		9,365	7,273	7,097
メニュー別実施回数	総合展示のみどころ	186	104	—
	第1テーマ	2	4	—
	第2テーマ	28	22	—
	第3テーマ	1	11	—
	第4テーマ	1	1	—
	第5テーマ	4	5	—
	その他	32	26	—
	①総合展示ダイジェスト	—	—	72
	②北海道の生き物	—	—	2
	③北海道の化石	—	—	2
	④アイヌ文化の世界	—	—	27
	⑤北海道の歴史	—	—	5
	⑥北海道のくらし	—	—	7
	⑦北海道の産業	—	—	2
	⑧博物館・学芸員の仕事	—	—	4
	⑨北海道博物館のあらまし	—	—	0
	⑩その他	—	—	16
備考	2017年度からメニューを総合展示のテーマ別から分野別に変更			

表5 学校団体を対象とした「はっけんプログラム」の推移（当館要覧2015、2016・2017を参照）

年 度		2015年	2016年	2017年
件 数		134	128	111
人 数		7,216	7,356	6,754
ク ラ ス 数		243	236	209
プログラム別実施回数	①ヒグマ	22	13	7
	②アンモナイト	4	1	5
	③アイヌ	114	119	128
	④縄文	62	38	18
	⑤くらし	41	56	50
	⑥そのほか			1

表6 イベントの参加者実績（当館要覧2015、2016・2017を参照）

行事区分等		2015年（総実績30回／2,590人）					2016年（実績41回／2,028人）					2017年（実績43回／2,602人）				
		担当研究グループ等による内訳					担当研究グループ等による内訳					担当研究グループ等による内訳				
		歴史	アイヌ	生活	自然	その他	歴史	アイヌ	生活	自然	その他	歴史	アイヌ	生活	自然	その他
子どもクラブ	外部講師による開催	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	参加者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	79	0	0	0	0	0
	当館職員による開催	2	2	1	2	0	2	2	2	1	6	2	2	2	3	2
	参加者	66	21	37	103	0	29	9	52	36	451	29	27	90	135	105
	開催数	2	2	1	2	0	2	2	2	1	7	2	2	2	3	2
	小計	66	21	37	103	0	29	9	52	36	530	29	27	90	135	105
ワークショップ	外部講師による開催	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	参加者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	34	0
	当館職員による開催	6	1	0	6	0	3	2	0	6	0	3	1	1	5	0
	参加者	622	11	0	141	0	144	21	0	164	0	151	28	11	158	0
	開催数	6	1	0	6	0	3	2	0	6	0	3	1	1	5	0
	小計	622	11	0	141	0	144	21	0	164	0	151	28	11	192	0
講座	外部講師による開催	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	1	1	0	1	0
	参加者	0	0	0	0	0	0	101	0	0	0	35	57	0	111	0
	当館職員による開催	2	1	2	2	0	5	6	0	2	0	5	5	2	1	0
	参加者	86	46	131	124	0	682	152	0	108	0	608	225	51	103	0
	開催数	2	1	2	2	0	5	9	0	2	0	6	6	0	2	0
	小計	86	46	131	124	0	682	253	0	108	0	643	282	51	214	0
講演会	外部講師による開催	1	0	0	0	8	0	0	0	3	3	0	1	1	1	5
	参加者数	41	0	0	1	990	0	0	0	379	213	0	86	77	58	423
	当館職員による開催	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	参加者数	170	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	開催数	2	0	0	1	0	0	0	0	3	3	0	1	1	1	5
	小計	211	0	0	1	990	0	0	0	379	213	0	86	77	58	423
合計	開催数	12	4	3	11	0	10	13	2	12	10	11	10	4	11	7
	参加者	985	78	168	369	990	855	283	52	687	743	823	423	229	599	528

表7 ちゃれんが子ども講座の参加者実績（当館要覧2015、2016・2017を参照。参加者の内訳は講座毎の館内報告書を参照）

分野	行事名	2015			2016			2017			累計
		参加者数			参加者数			参加者数			
		総数	子ども	大人	総数	子ども	大人	総数	子ども	大人	
歴史	文字で遊ぼう♪ 消しゴムはんこづくり	48	29	19	17	8	9	19	10	9	84
歴史	いのりのしるし？ 絵馬づくりに挑戦！	18	9	8	12	6	6	10	6	4	40
アイヌ	植物のせんで、糸を作ろう！編んでみよう！どんなものができるかな？	12	—	—							12
アイヌ	アイヌ語であそぼう！	9	4	5	5	3	2	10	6	4	24
アイヌ	じっくりムックリ講座				4	2	2				4
アイヌ	アイヌ音楽 うたおう・おどろう・ならおう・ひこう							17	9	8	17
生活	重いモノを動かす道具	37	—	—							37
生活	のこぎりでコースターをつくろう				41	17	24				41
生活	稲わらで縄をつくって、長なわとびに挑戦！				11	5	6				11
生活	トコロテンの不思議							23	11	12	23
生活	雪のなかで宝さがし							67	43	24	67
自然	草原の王者・トノサマバッタをさがそう	63	—	—	36	22	14	48	26	22	147
自然	アンモナイトを解剖しよう！	40	20	20				67	33	34	107
自然	アンモナイトのレプリカをつくろう							20	12	8	20
特展	アンモナイトを解剖しようA				67	31	36				67
特展	アンモナイトを解剖しようB				83	38	45				83
特展	アンモナイトのレプリカをつくろうA				80	39	41				80
特展	アンモナイトのレプリカをつくろうB				80	39	41				80
特展	羊毛でアンモナイトがつくれちゃう！？				74	31	43				74
特展	マイナス20℃でシャーベット！？				67	33	34				67
特展	世界一おいしい火山の実験				79	40	39				79
特展	ちいさな野球盤づくり							60	29	31	60
特展	フェルトで野球のバットとボールのストラップをつくろう							45	20	25	45

表8 アイヌ文化研究グループが企画した教育普及行事の実績（当館要覧2015、2016・2017を参照）

年度	行事区分	開催日	行事名	参加者数	講師区分	担当・講師
2015	ワークショップ	10月3日	アイヌ語“解説”講座	11	内部	田村雅史・大谷洋一
	講座	1月30日	北海道・北東アジアの自然と暮らし① 樺太アイヌの『毘』を徹底的に解剖しよう	46	内部	出利葉浩司
2016	ワークショップ	10月15日	アイヌ民族の植物利用ーイラクサの繊維をとってみよう	12	内部	大坂拓・遠藤志保
	ワークショップ	10月23日	ムックリを作って、鳴らしてみよう	9	内部	甲地利恵
	講座	7月23日	アイヌ民族が伝えたふしぎな話	35	内部	遠藤志保
	講座	10月2日	アイヌ語講座① アイヌの物語に親しもう	16	内部	大谷洋一
	講座	10月9日	アイヌ文化研究の最前線① ロミン・ヒチコックがみた北海道・アイヌ文化	26	内部	出利葉浩司
	講座	10月16日	アイヌ文化研究の最前線② アイヌの木綿衣の刺しゅう その歴史をたどる	26	外部	津田命子氏（元北海道立アイヌ総合センター）
	講座	10月30日	アイヌ文化研究の最前線③ アイヌ口承文芸の「語りかた」をさぐる	27	外部	奥田統己（当館非常勤研究職員・札幌学院大学）
	講座	11月6日	アイヌ語講座② アイヌの物語に親しもう	18	内部	遠藤志保・大谷洋一
	講座	11月13日	総合展示「アイヌ文化の世界」を語る① 日本の博物館所蔵の樺太（サハリン）アイヌの金属口琴と、その周辺	48	外部	直川礼緒氏（日本口琴協会）
	講座	11月27日	総合展示「アイヌ文化の世界」を語る② アイヌの儀礼用冠ー地域差と変化を探索	24	内部	大坂拓
	講座	12月11日	総合展示「アイヌ文化の世界」を語る③ 「幻の建設」に込めた意志ーパチラー八重子らによる「アイヌウタリー中等学校建設」の活動ー	33	内部	小川正人
	ワークショップ	10月22日	アイヌ民族の編みものをつくるーエムシアツの技術でプレスレットー	28	内部	大坂拓
2017	講座	6月11日	学校をつくるー近代北海道のアイヌ民族による小学校設置の取り組みー	48	内部	小川正人
	講座	11月19日	アイヌ民族の刀帯ーその変化を探索	26	内部	大坂拓
	講座	2月24日	アイヌ語講座 見てみよう！カムイとアイヌの物語①（企画展関連）	40	内部	遠藤志保
	講座	3月10日	アイヌ語講座 見てみよう！カムイとアイヌの物語②（企画展関連）	57	外部	安田千夏氏、矢崎春菜氏（アイヌ民族博物館）
	講座	3月24日	アイヌ語講座 見てみよう！カムイとアイヌの物語③（企画展関連）	58	内部	大谷洋一
	講座	3月25日	アイヌ音楽を知らない人のための アイヌ音楽入門講座（企画展関連）	53	内部	甲地利恵
	講演会	3月17日	アイヌの物語世界（企画展関連）	86	外部	中川裕氏（千葉大学）

Progress of Ainu Language Block: Utilization in Regular Activities

Masashi TAMURA

When the Hokkaido Museum first opened, the author of this study created an Ainu language block to be displayed in the Main Exhibition. Firstly, this study reports on the Ainu language block's role in the museum's regularly-held, child-oriented activity entitled 'Ainu-go de Asobo' ('Ainu Language Playtime'), including an overview of the project and program details. Next, in light of the fact that 'Ainu-go de Asobo' had the least number of participants of all of the museum's regular activities, this study analyzes the participation records and results of visitor surveys of all museum events, and explores how the Ainu language relates to the needs of museum visitors. Based on this analysis, this study speculates that, in the field of Ainu culture-related classes, there is interest and need for lectures

or classes which provide information about culture and history, and provide a basis for participants to engage and resolve questions on their own. Further, we observe that there is interest from both children and their guardians in classes formatted for active participation, such as nature observation meetings. Thus, the authors assess that the regular activity plans that they have implemented did not match visitor needs. To make a closing remark upon future considerations for Ainu language, this study considers the differences between museum education and linguistic education, raises questions regarding the social position of museums in relation to linguistic issues, and performs summary from a linguistic point of view.